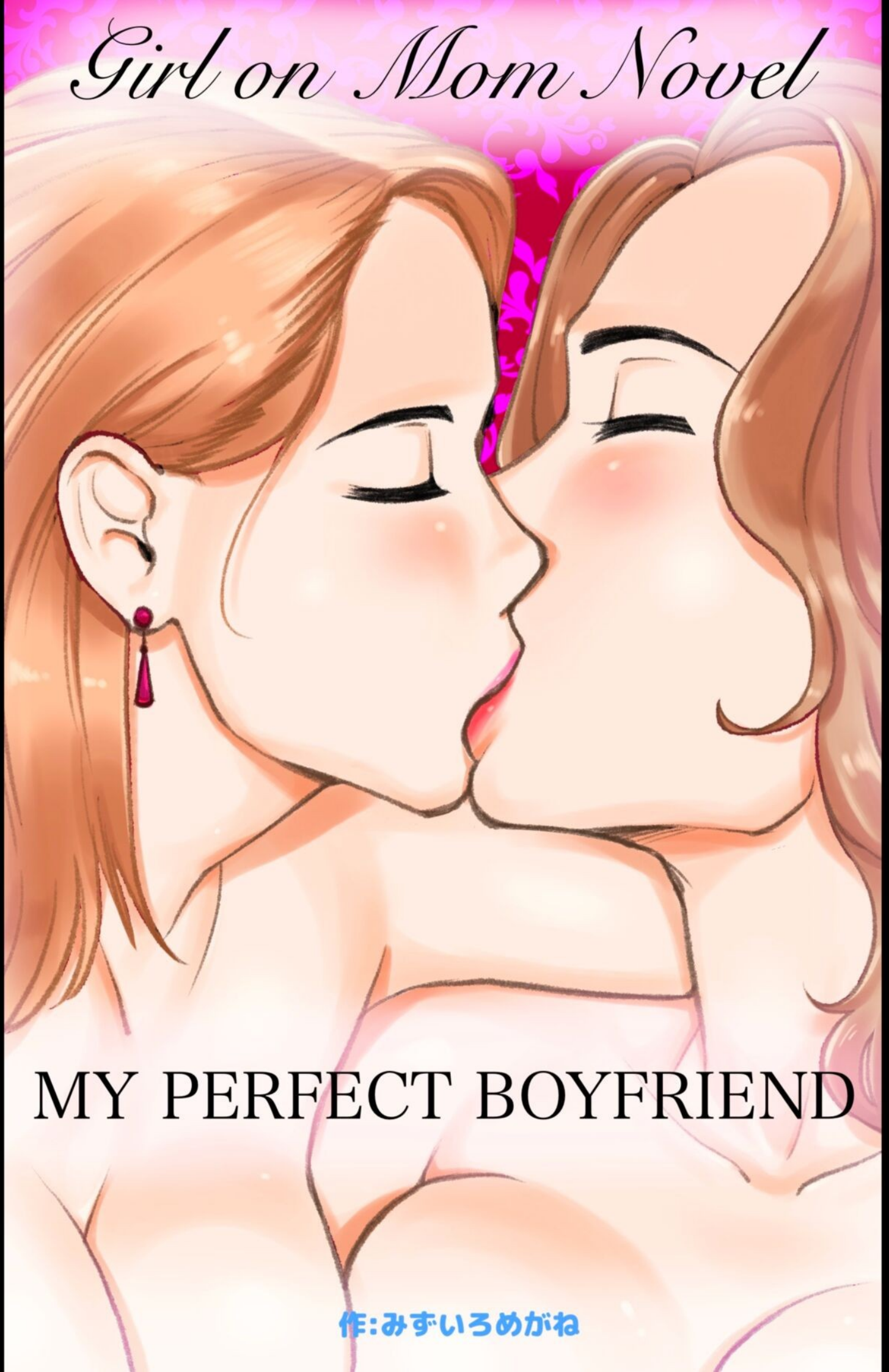


Girl on Mom Novel



MY PERFECT BOYFRIEND

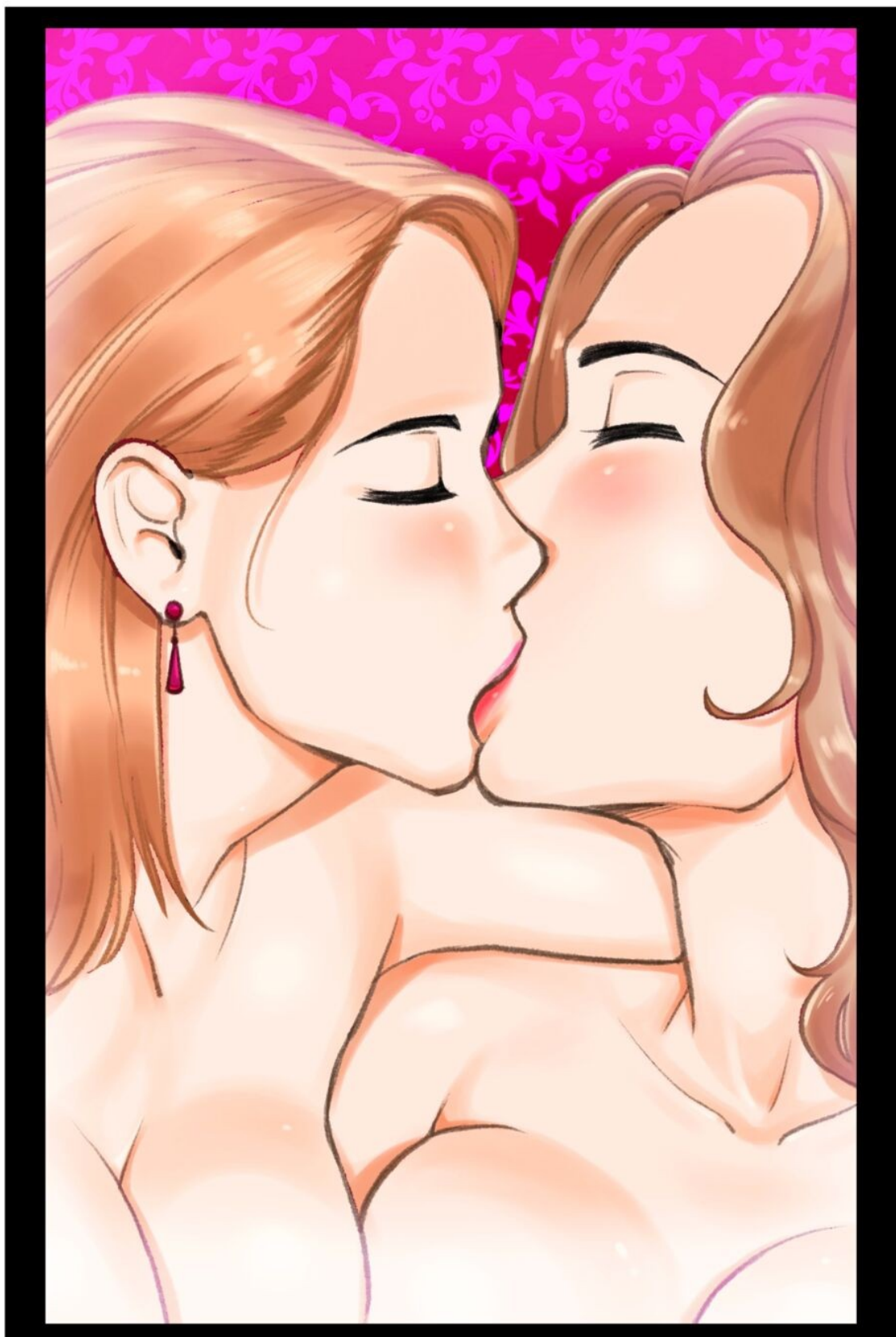
作:みずいろめがね

★はじめに★

- ・このコンテンツは成人向けです。未成年の方はご覧になれません。
- ・このコンテンツの著作権はみずいろめがねに属します。
- ・このコンテンツは100%フィクションであり、作中にある人物・場所・事件等は現実の物といかなる関係也没有ありません。
- ・上記にご同意いただいたうえでお楽しみ下さい。



♥MY PERFECT BOYFRIEND ♥



♥目次

1・ママは彼氏シミュレーター

2・デートは完璧

3・「ボーイフレンド」との初夜

4・わたしの処女はママのもの

5・完璧なカップル

あとがき

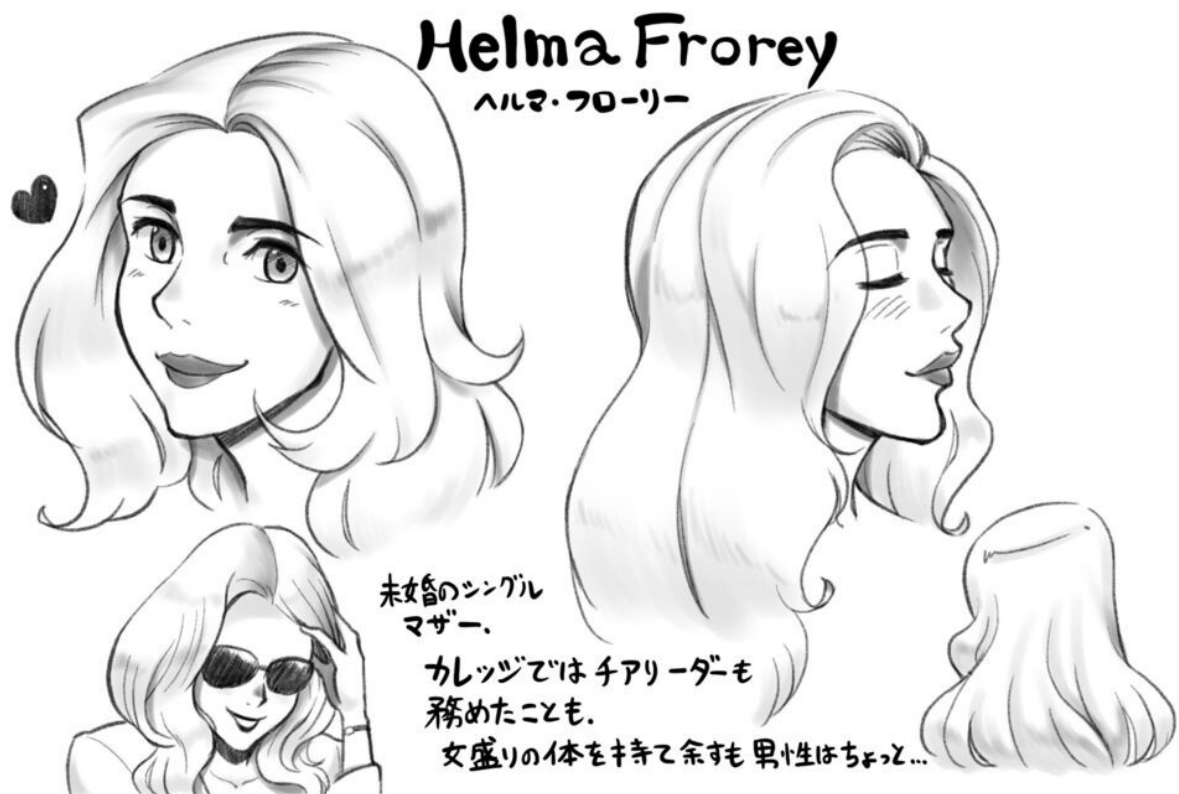
*各項目をタップするとその章へジャンプします。

1・ママは彼氏のシミュレーター



ヘルマ・フローリーは自宅の居間のトレッドミルの上でランニングの最中でした。軽快なポップミュージックが流れる中、彼女はもう3マイル分走っています。

彼女は体にピッタリとフィットしたランニングタイツとタンクトップを身に着け、軽々と足を動かしています。一步走るたびに胸囲96センチHカップの乳房が揺れますが、まったく気にする様子もありません。バランスを崩すこともなくランニングにいそしんでいました。タイツを押し上げる大きなお尻は二つのバレーボールのよう。標準サイズを超えているため腰回りの布地を引っ張り、嫌がうえにも股間の形を強調するようにタイツが食い込んでいます。トレーニングの後にシャワーを浴びるため、パンティは履いていません。なので谷間の形がくっきりと表れているのです。腰は引き締まり、中年女性にしてはほっそりしているので、胸とお尻はなお一層強調されています。



ヘルマは36歳のシングル・マザー。小さな化粧品会社でCEOを務めています。彼女は仕事を楽しんでいて、周りとも上手く協調

できるやり手の女性です。彼女の会社はほとんどが女性の社員と取締役で構成されていました。ヘルマは大きな野心を持ちません。その代わり顧客と従業員を大切にし、いつも最高の仕事をしたいと心掛けています。

ルームランナーを降りると、ヘルマは10kgのダンベルを両手に持って筋力トレーニングを始めました。特に大胸筋を鍛えています。なぜなら彼女の胸はことのほか大きくて重いので、胸や腰回りを強化する必要があるからです。おかげでそのサイズにも関わらず乳房はほとんど垂れていません。張りのあるふたつの肉球が弾んで動くのでした。男性はもちろん、女性でも思わず見惚れてしまう美乳なのです。

彼女が薄っすらと汗を掻き、肌をほてらせます。そうになると体全体が桃色に染まり、ただでさえ魅力的な30代の女性をなお引き立てます。今はスッピンなのにも関わらず、ナチュラルな美貌はかえって輝いています。眉は太くクッキリしていて意志の強さを感じさせ、頬骨は控え目ですが、顎は適度に張っていて力強さがあります。眼は大きく、いつも笑っているように優しさを湛えています。鼻は美しく聳え、女神のような顔立ちを整えていました。

----- 突然玄関のドアが開きました。乱入してきたのは1人の美少女です。

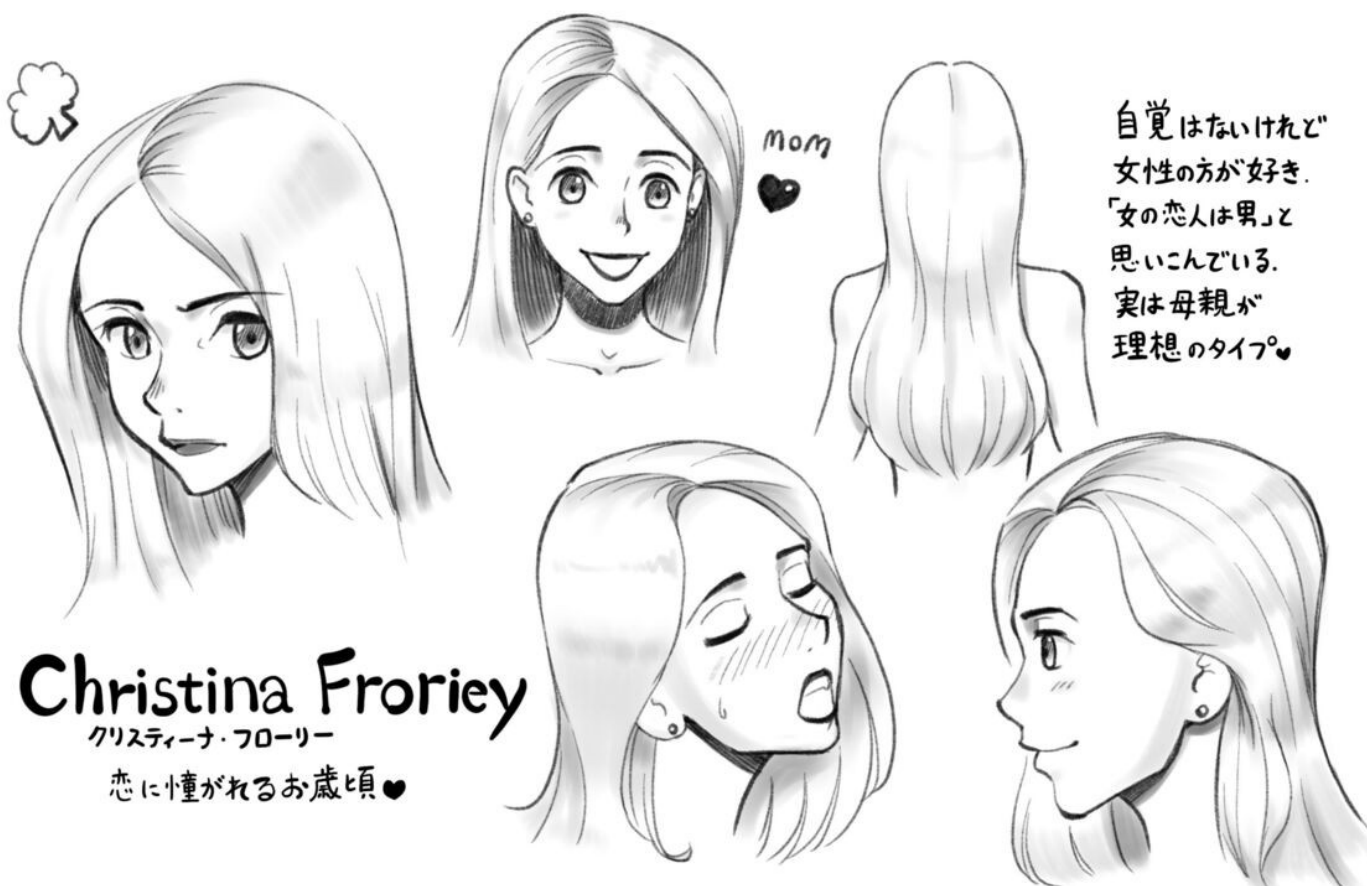
女の子はものも言わず、ドスドスと乱暴な足音を立てて、居間のソファにどっかりと座り込みました。

「まあ、クリスティーナ、どうしたの？」

ヘルマは驚いて振り返り、ダンベルをラックに置いて、少女の方へ行きました。隣に座ると、腕を組んでむくれている彼女の肩を抱きます。

「ダーリン、一体何があったの？ 今日リックとデートのはずだったじゃない」

クリスティーナと呼ばれた女の子は、ヘルマの実の娘でした。ブロンドの髪の毛は母親よりも艶やかで、顔立ちはもちろん若々しく、体つきもまだ成長中です。



「クリス？」

「私って魅力がないんだわ」

ようやくクリスティーナが返事をしました。

ヘルマが眉をひそめます。何かの冗談にしか聞こえません。

「魅力がないってどういうこと？」

「分かるでしょ、ママ？ 私が1人で歩いて帰ってきたのが。『歩いて』よ、信じられないわ。デートをドタキャンされて、自分の足で歩いたの、彼の車で送られるのじゃなく」

「リックはどうしたの」

ヘルマは娘のボーイフレンドを思い出しました。ハンサムではありますが、どこか軽薄さを感じさせる、あまり印象の良くない若者です。とはいえ、若い男性はそんなものだとはヘルマは思っていました。ところがクリスティーナはカンカンに怒っているのです。

「友達から聞いたの、あいつ、二股どころか三股、四股掛けてるんだって。何人ガールフレンドがいるのか見当もつかないわ」

クリスは顔をしかめました。が、その横顔はなんともチャーミングで、ヘルマにはかえって可愛らしく見えます。

「それで喧嘩になったのね」

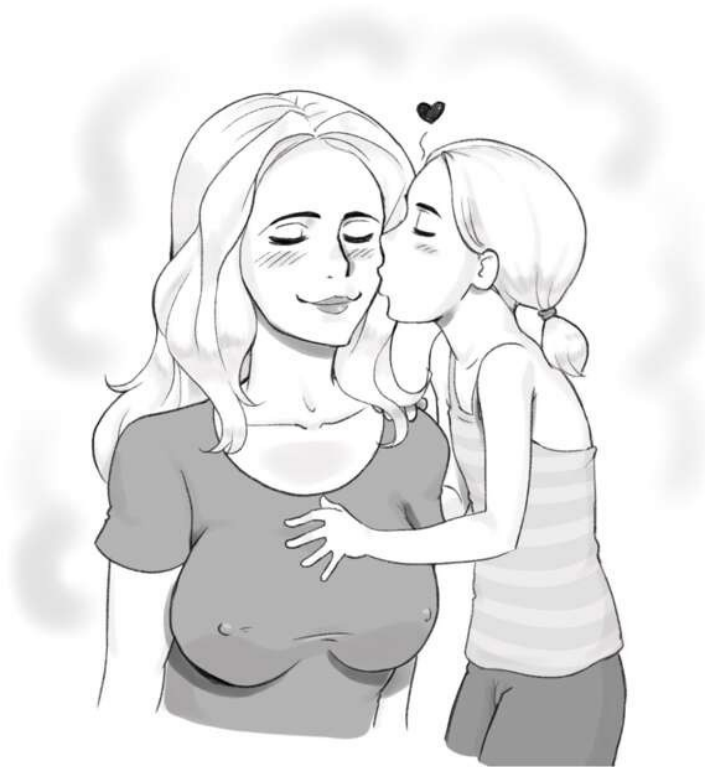
「喧嘩にさえならなかったわ。私がちょっと文句を言ったら、あいつ、開き直って謝りもしないの！ あたしを腰の軽い女みたいな言い方で侮辱して、さっさとサヨナラよ。彼のシボレーのスポーツカーで。それで歩いて帰る羽目になったわけ。まったく馬鹿馬鹿しいったら」

ヘルマはかつての彼氏を思い出していました。彼女は18歳の時にクリスティーナを出産していました。とても若い妊婦でしたが、相手の恋人はヘルマが妊娠したのを知った途端、掌を返したように冷たい態度を取り、どこかへ消えてしまったのです。ヘルマは未婚の母親になりました。支えてくれたのは、今はもう亡く

なった両親です。彼らはヘルマの不運を慰め、赤ん坊の誕生を盛大に祝ってくれたのです。

幸いというか、クリスティーナはヘルマ似でした。美人の母親そっくりの美少女になり、相手の男性の面影はほとんどありません。彼らを知っていた人々は、クリスティーナが99%母親の遺伝子を受け継いでいると断言したものです。

未婚の若い女性にしては、ヘルマは恵まれていました。弁護士が無責任な元恋人を探し出して慰謝料を請求してくれたので、彼女はそれと親の財産を元手に友人と共同で会社を立ち上げ、幸いにも経営は順調です。赤ん坊はすくすくと育ち、素晴らしく魅力的な子供から少女へ成長しました。



ヘルマはクリスティーナに夢中でした。男に見捨てられた思い出も、娘の魅力の前にはすっかり色褪せ、なんのトラウマにもなりませんでした。ですが、それ以来男性とのデートはほんの数回

きりで、恋人同士にまで発展することはありませんでした。それよりも娘の事が気がかりで、SEXの最中でさえ、クリスティーナが家で泣いていないか心配したほどです！

その代わりと言ってはなんですが、ヘルマはなぜか女性にもモテる女でした。社員ばかりでなく顧客の中にも彼女へ色目を使う女性がいて、デートへ誘われたものです。興味本位でつき合ってみると、案外女性の方が気持ち良いことが多く、愛情関係のもつれもなく、純粹にデートを楽しめたのです。もちろんレズSEXも経験し、新しい世界が彼女の前に開かれました。クリスティーナが幼い頃は時々ベビーシッターの少女とエッチしたこともありました。アルバイトの女の子はみんなヘルマに愛されることを喜び、貴女みたいな素敵な大人になりたいと言っていました。ある時など彼女はレズビアン系のベビーシッターにオナニー用のディルドーとストラップオンを贈られ、使い方まで習わされました！

とはいえ、その行為も娘が成長するまでは抑えられており、クリスが18歳になってようやく新しい恋人を（男女を問わず）作るべきかもしれないと思い始めていたところなのです。

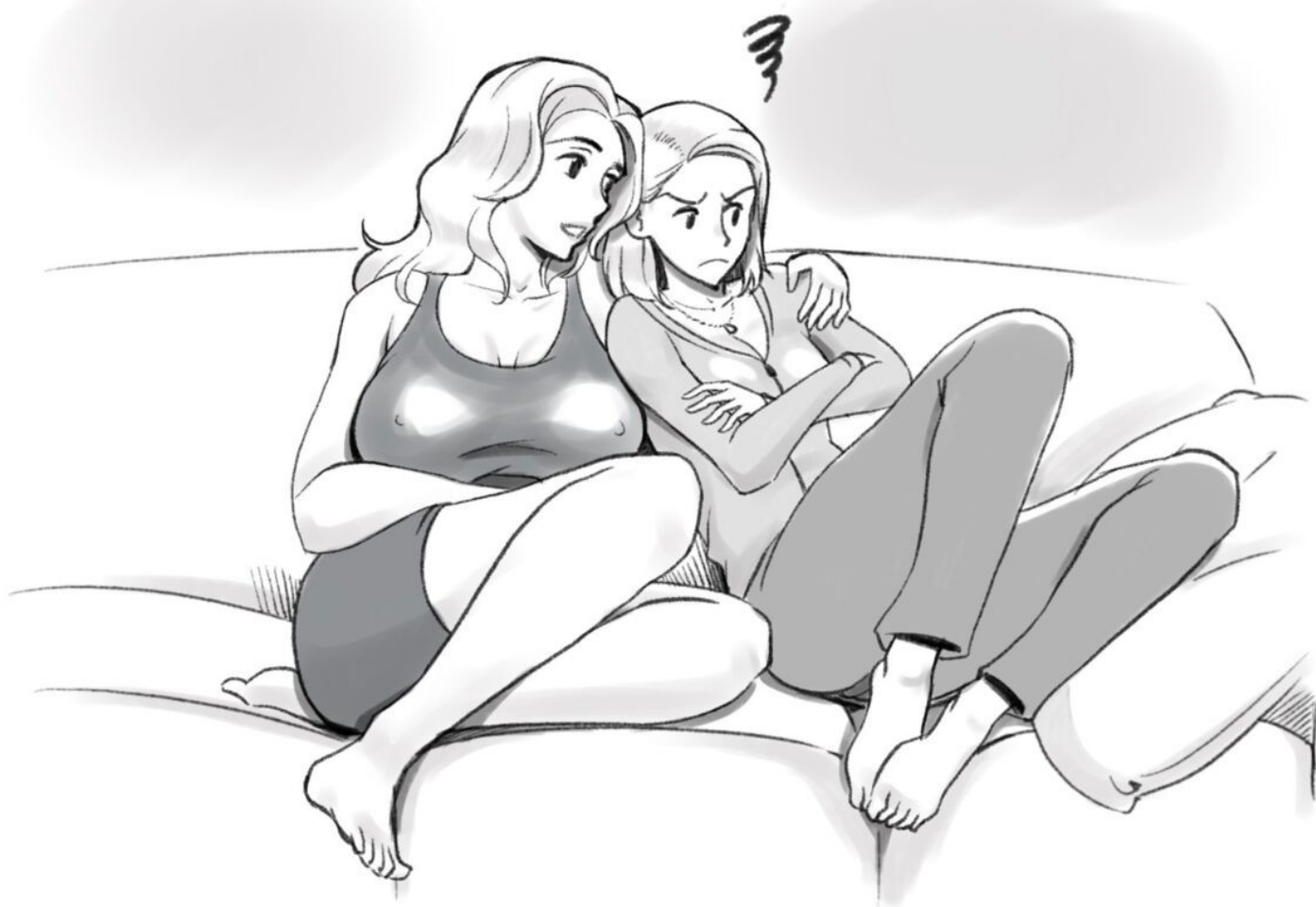
ヘルマはあらためてクリスティーナを品定めしました。

両性とのSEXを経験した後なら、クリスはどちらの性でも求愛者が現れることが、彼女には分かります。形の良い桃色の唇、瑞々しい素肌、胸は母親ほどではありませんが87センチFカップで、若いだけあって張りのよい乳房が尖り、乳首が上向きになっています。腰はくびれ、お尻は引き締まり、太股はまだ若い鹿のようにほっそりしていますが、みずみずしい力が漲っています。彼女の肉体は立っているだけで一幅の絵になるのです。

言うまでもなく顔立ちは美しく、幼い頃はモデル雑誌に写真が掲載されたほど。クリスティーナがそれほど乗り気ではなかったので長続きしませんでした、いつでもファッションモデルになって欲しいと言われているのです。

こんな素晴らしい娘を振った男に腹は立ちましたが、同時に、クリスティーナが誰か他の男に抱かれている姿を想像すると、ヘルマはカッとなりました。嫉妬ではありません。それどころか彼女は、娘を汚す人間が許せない、自分以外に彼女の肌に触れる男がいることに耐えられないのでした。

ふとその事に気づき、ヘルマは動揺しました。まさか「娘に」嫉妬するのではなく、「男に」怒りを覚えるとは…。それではまるで恋人を横取りされた女のようにです。彼女は動揺を悟られまいと、クリスティーナの肩を冗談っぽく揺すりしました。



「逆に考えたらどう？ 無責任な男に弄ばれるより、しっかりした男と付き合うべきという教訓を学んだのよ。あなたの男を見る目は前よりずっと確かになったわ」

「そこまで冷静になれないわよ」

クリスティーナはソファの上で体をズラし、母親に寄り掛かりました。

「少なくともリックは素晴らしい女性を失った不運を嘆くべきね」

「私がその素晴らしい女性？ 冗談でしょ」

実のところ、クリスティーナは自分の姿に自信がありません。というのも、すぐ隣に大人の色気たっぷりの母親がいるからです！ 彼女に比べれば自分など痩せて貧相な女でしかないと思ってしまいます。

ヘルマはヘルマで、自分が比較対象になっているとはまったく気づいていませんでした。

「ママは冗談なんか言わないわ、こんな時に」

「慰めてくれてありがとう。でも、18にもなって恋人がいない、SEXも経験していない女の魅力ってどんななの？ クラスの娘の半分以上はもうとっくに経験済みなのに」

「SEXがステータスシンボルじゃないのよ。自慢する方がおかしいわ」

「でもまだ大人じゃない！」

「ねえ、本当にしたことがないの？ ディープキスも？」

「ないわよ、全然！ キスだってマジなのはママ以外一度もないんだから。…何を笑っているの？」

思わず微笑んだヘルマに、クリスティーナは渋面を向けました。ヘルマは慌てて手を振り、

「いいえ、笑ったんじゃないの。ただ、なんだか、…嬉しくて」
「嬉しい？」

「ええ。どうしてかしら、自分でも分からないのだけれど、私としかキスしていないのが、ちょっと…ごめんなさい、変な事を言ったわね」

クリスティーナはジッとヘルマを見上げました。まだ母親はトレーニングの影響で薄っすらと汗を掻いています。小皺もありますが、同じ歳頃の女性に比べ、ヘルマはとても若々しく精力的に見えました。どんな男性だってプロポーズしそう。

「…私もママみたいな美人だったらよかったのに」

「まあクリス、何を言うの！？ あなたはもうとっくの昔に魅力的よ」

「だったらなんで彼氏ができないの？」

「いいことクリスティーナ、大切な人と巡り合うのは時の運なの。決して焦ってはいけないわ。いずれあなたにも運命の恋人が現れて、うんと幸せになりますからね」

「はいはい、ありがとう」

「ママが男性だったら、あなたを放っておいたりしないわね」

「またもう、お世辞を言う…そんなに気を遣わないで」

「いいえ、絶対にお世辞じゃない。本当よ。あなたほど魅力的な少女を手放すものですか。ましてやデートを放り出すなんて考えられないわ、犯罪ものよ」

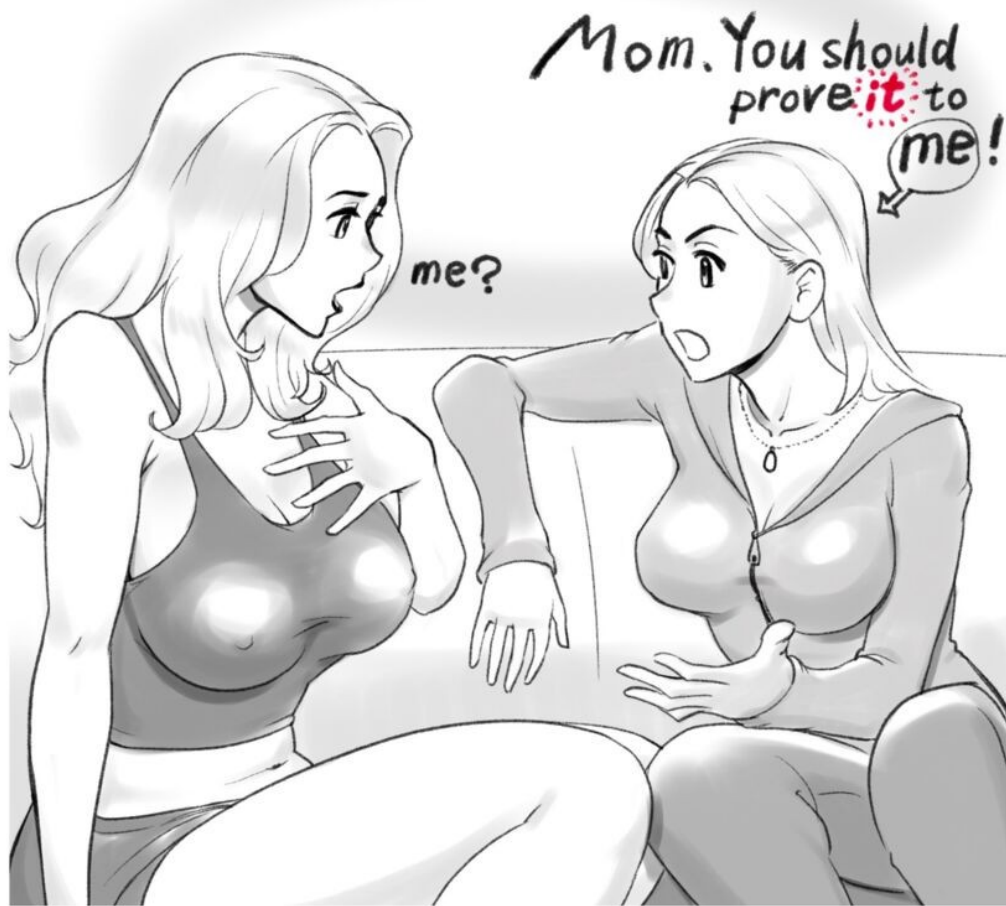
クリスティーナは妙な目つきで母親を見上げました。

「それなら証明して」

「証明って？」

「私を恋人にしたいんでしょう？ なら態度で示さなきゃ」

「私が男ならの話よ」



「ほらやっぱり。自分は出来ないから、娘を慰めてるんだわ」

一向に気分が治らない娘に、ヘルマは困りました。

「ハニー、どうしたらいいの」

「だから、ママが男だったらっていう前提で、私にアプローチするの」

「ちょっと待って。…クリス、ママは女なのよ？ それにあなたの母親」

「ええ、それはずっと前から知ってる」

「まさかあなたは、そのう、男の恋人がデートするような事を私にしろと言うの？」

「さっきからそう言ってるわ」

「ええ…？」

「ママだってデートくらいしたことがあるでしょ？ 私の父親と。だって私が生まれたんだし」

「パパのことは言わないで」

「私だって言いたくないわよ。DNAはあるんでしょうけれど、ママを泣かせる男なんて最低だわ」

「クリスティーナ…」

思わずヘルマは娘にときめいてしまいました。今の発言は、彼女の胸を打ったのです。

「それでミス・ヘルマ・フローリン、あなたは娘のクリスティーナへどんな手ほどきをしてくれますか？」

馬鹿丁寧な娘の言葉に、ヘルマは諦めたようにため息をつきました。

「ねえ、いいこと、^{スウィートハート}愛しい子。ママはあくまで真似をするだけなのよ？」

「なんでもいいから早くしてちょうだい」

ヘルマは空咳を一つすると、クリスティーナの肩をもう一度抱き寄せました。そして真面目な顔でこう言ったのです。

「ダーリン、世界中の誰よりも愛してる。君を離さないよ」

思わずクリスティーナは吹き出していました。

「クリス」

「だって恥ずかしいんだもの！」

「笑うのだったら止めるけど？」

「ああ、いいえ、ミス・フローリン。続けて。それから？」

ヘルマは突然緊張しました。軽く頬に接吻し、冗談の一つも言って、終わるつもりだったのです。ところが彼女は娘の顔を正

面から見ると、その美しい顔にとっても居た堪れなくなっただけでした。顔から火が吹き出しそうなほど頬が熱くなります。

（まあ、どうしたというの、ヘルマ？ 若い娘みたいに。あなた、初恋でもしたの）

冗談を心の中で言い、ヘルマはグッと娘の肩をさらに寄せました。するとクリスティーナの方も真面目な顔になります。自分から目をつむり、唇を突き出しました。彼女の頬がほんのり赤く染まっています。

ヘルマは予定を変更し、まず予行演習として娘の頬に軽く唇を触れ、それから鼻の頭にチュッとキスし、そして…ゴクリと生唾を飲んでから、桃色の唇にそっと触れました。ただそれだけなのに心臓が破裂しように動悸し、心を揺さぶります。思春期の少女独特の爽やかで華やかな体臭がしました。10秒間もそうしていたでしょうか。ヘルマは唇を静かに離しました。

クリスティーナは薄目を開け、言いました。

「…それだけ？」

「それだけって？」

「世界中の誰よりも愛している恋人が、ちょっとキスするだけで終わるの？ これじゃあ、いつもの送り迎えのキスとなんにも変わらないじゃない」

ヘルマはさらに戸惑い、混乱しました。

「で、でも、クリスティーナ。これ以上は本当の恋人みたいだわ…」

「ママはそれを証明しなくちゃいけないのよ、ミス・ヘルマ。私がリックに振られた代わりに、あなたが私を性的魅力に溢れた少女だって態度で示すべきだわ」

（『性的魅力』ですって！？）

ヘルマがますます赤くなります。

「お願いよクリス、分かって。私はあなたの母親なのよ」

「そんな事関係ないわ。ママが私に誠実でなければ、今日はもう自分の部屋に閉じこもって夕食も一緒にしませんからね」

こんな風に脅迫されたせいで、ヘルマは覚悟しなくてはならないのを知りました。

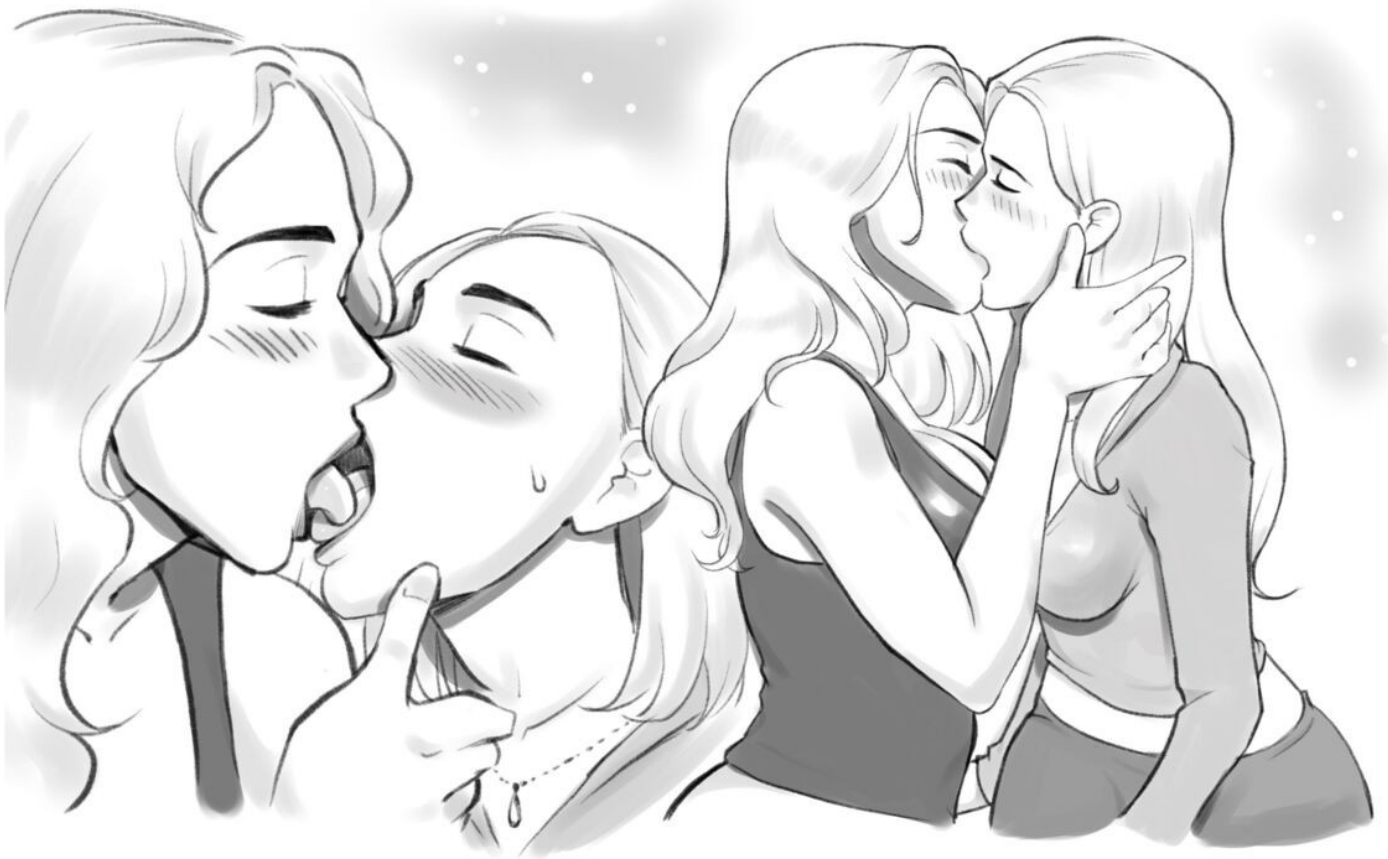
「…それじゃあミス・クリスティーナ。くれぐれも後悔しないでね。これからするのは、自分の母親とのファースト・キスなのよ？ 恋人よりも先にする」

「そちらこそ後悔しないで、ママ、娘とディープキスをすることを。不道德だと思うなら、ここまでよ」

返事のかわりにヘルマは今度こそクリスティーナをしっかり抱き寄せ、思い切って唇を重ねました。今度は本気のキスです。自分の唇で娘の唇を挟み、愛撫し、舌先を伸ばしてクリスティーナの唇の表面を撫でました。唾液を唇に塗りたいく、さらに二つの肉丘を割って、その下の真っ白な歯に触れます。そこも丁寧になぞり、白い鍵盤を掻き鳴らしました。すると秘密の扉がそっと開き、ヘルマの舌を迎え入れます。ヘルマは舌を口内へ伸ばし、娘の舌を舐めました。

ギュッとクリスティーナが抱きつき、母親の腰に両腕を回して、しっかりと固定します。クリスティーナは無意識に自分の舌を蠢かし、初めてのディープキスを逃すまいと、ヘルマの舌と擦り合いました。

二人の唇の間から湿った艶めかしい音が漏れ、端から唾液が垂れてきます。クリスティーナはもうすっかりキスに夢中で、自分から舌を伸ばして母親の愛撫をねだりました。伸ばされた舌をへ



ルマは唇をすぼめてヴァギナのように迎え入れ、あるいはペニスのように頭を振ってフェラチオしました。ヘルマは自分でも気がつかないうちに、自分が知っているキスのテクニックを全部使っていました。口蓋を舐め回し、唾液を吸り、舌をいやらしく絡め合って、舌と唇で実の娘を犯したのです。

そんな母親にクリスティーナは生まれて初めての悦楽を感じ、互いの大きな胸を密着させ、腰をしっかり抱き締めて、無我夢中でヘルマの舌を貪りました。そしてとうとう、人生初めてのアクメを感じたのです。舌から全身へとろけるような快感が広がり、頭の天辺へ痺れるような疼きが走ったのでした。すでにオナニーを経験済みのクリスティーナですが、まさかキスでこれほどイカされるとは思ってもいなかったのです。

ようやく唇が離れ、その間に透明な唾液の橋が掛かりました。二人は見つめ合いました。どちらも頬がリンゴのように赤くなっています。母親と娘は荒い息を吐き、キスの余韻に酔い痴れていました。

「…ああ、ママ！」

とうとうクリスティーナは言いました。

「最高のプレゼントだわ！私、ついに大人のキスをしたんだわ！リックなんてクソみたいなものよ」

「お行儀が悪いわよ、『クソ』なんて」

そう言いながら、ヘルマは微笑んでいました。そして濡れた唇についた娘の唾液を無意識に舐めて、

「クリス、あなたって、なんて言うか…」

彼女は二の句が継げません。

(最高のSEXパートナーになれるかも)とは言えませんから。

クリスティーナが悪戯っぽく笑います。

「すごく魅力的？」

「それ以上よ。ママは、あなたがこんな…こんなに素敵な女の子だったなんて、真剣に思ってなかった。ママが間違っていたわ」

クリスティーナはすっかり嬉しくなって、ヘルマの頬にそっと触れました。

「…それじゃ後悔してない？ママ」

「あり得ないわ、ダーリン」

二人はまた自然に唇を重ねました。たちまち極上の悦びが二人を支配し、キスの虜にさせます。ヘルマはクリスティーナをソファへ押し倒し、キスの雨を降らせました。

「…ああ！本当の恋人ってこうするんだわ」

うっとりとして娘が呟きました…。

2・デートは完璧

ディープキスのおかげで、二人の間に欲望が膨れ上がりました。けれども、まだ彼女たちは母親と娘であるという関係から一歩踏み出せません。キスの嵐が止んだ後、ヘルマとクリスティーナは戸惑い気味に互いを見遣りました。

とうとうクリスティーナが半分ふざけたような口調で言いました。

「…さて、ファーストキスも済ませたんだから、お次はデートしなくちゃ。そうでしょ？」

「ええ、そうね。シボレーじゃなくって中古のスポーツカーしかないけれど」

「あら、それって素敵じゃない？ 少なくとも乗せてくれる車があるんだから」

「もちろん歩いて帰らせるなんて、ママは絶対しないわ」

「OK！それじゃ支度しましょう」

クリスティーナはソファから飛び起き、自室へ駆け込みました。お化粧を直すのです。ヘルマもベッドルームへ行き、服を選び始めました。

クリスティーナはリックのために着ていた服を脱ぎ捨て、あらためて服を漁りました。

（よく見ればこんなダサい下着ダメだわ。もっと可愛いのにしなきゃ）

女らしさを求めるリックのために勝負下着のつもりで穿いていた白いレースのパンティとブラジャーを脱ぎ、床へ放ります。ク

リスティーナの初々しい割れ目が現れ、股間に薄っすらと毛が生えています。彼女は真っ赤なシースルーのパンティとブラジャーに穿き替えました。彼女がこっそり通販で買ったものです。

そしてわざと破れ目をつくったダメージデニムを履き、ブラジャーが微かに透けて見えるような白いショートのTシャツをラフに着ます。素足のまま白いスニーカーを履き、耳のピアスにはヘルマの誕生日プレゼントのイヤリングを嵌めました。

（貞淑な女じゃなくって行動的な女の方がいいわ）

ヘルマの方は散々迷った挙句、ブラジャーなしで黒いキャミソールを着ます。大胸筋を鍛えているからこそその大胆な決断。布地を押し上げて見える乳首が艶かしさを表していました。それを隠すために男物のショートジャケットを羽織り、腰には太腿の付け根が見えるほどのレザーのショートパンツを履きます。

（ちょっと若作りし過ぎかしら）

髪を丹念に梳かし、紅色のリップを塗って、ミラーのサングラスを掛けました。アイシャドウや肌クリームは控え目にし、睫毛もそのまま。元々彫りの深い顔立ちだから出来ることです。ヘルマは歳を気にして厚化粧するのが嫌いでした。パンプスは運転を考えてカジュアルなローファーを選びました。

「まあ、ママ！カッコいいわ」

「クリス、なんて大胆なの？」

二人は互いを見て驚きました。まさに好みの格好です。

「破廉恥かしら？」

クリティーナは心配そうに自分のファッションを眺めました。母親に嫌われたくなかったのです。けれどもヘルマは首を振り、

「そうじゃないの、なんというか…とてもセクシーだわ。活発だし、とても似合うと私は思う」

それどころかTシャツから透けて見えるFカップブラの大胆さに思わず唾を飲み込んでしまいました。

(私ったら、娘に対してはしたない!)

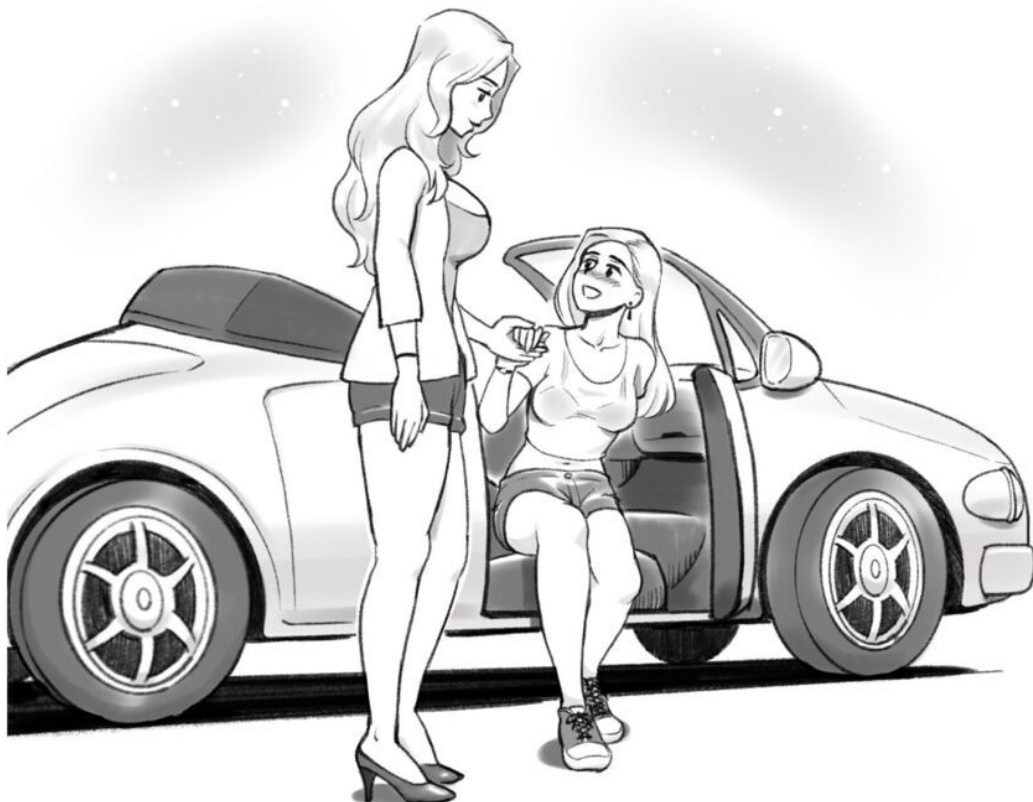
クリスティーナはスラリとしたスタイルで、若々しさが漲り、とても魅力的に見えます。

対するヘルマの方も、クリスティーナから見れば思い掛けないほど男性っぽく、それでいてセクシーな魅力に溢れていました。

(ママ、センス良過ぎる…こんな彼氏が欲しかったのよ)

彼女が男物のジャケットを自然に羽織る姿はとてもカッコよく、おまけにブラジャーの助けを借りず乳房の形を露わにするキャミソールが蠱惑的です。ジャケットがずれてチラリと覗いた服の下から見える乳首の形に、クリスティーナはショックなほど欲望を掻き立てられました。

(いやだ、私って…ただのデートじゃない、母親との)



ふたりとも互いの姿に感動して、かえって落ち着かない気分になります。ヘルマはためらいがちに空咳をし、クリスティーナを誘いました。

「それじゃミス・クリスティーナ、デートへ出掛けましょうか？」

「ええ、ミス・ヘルマ。喜んで」

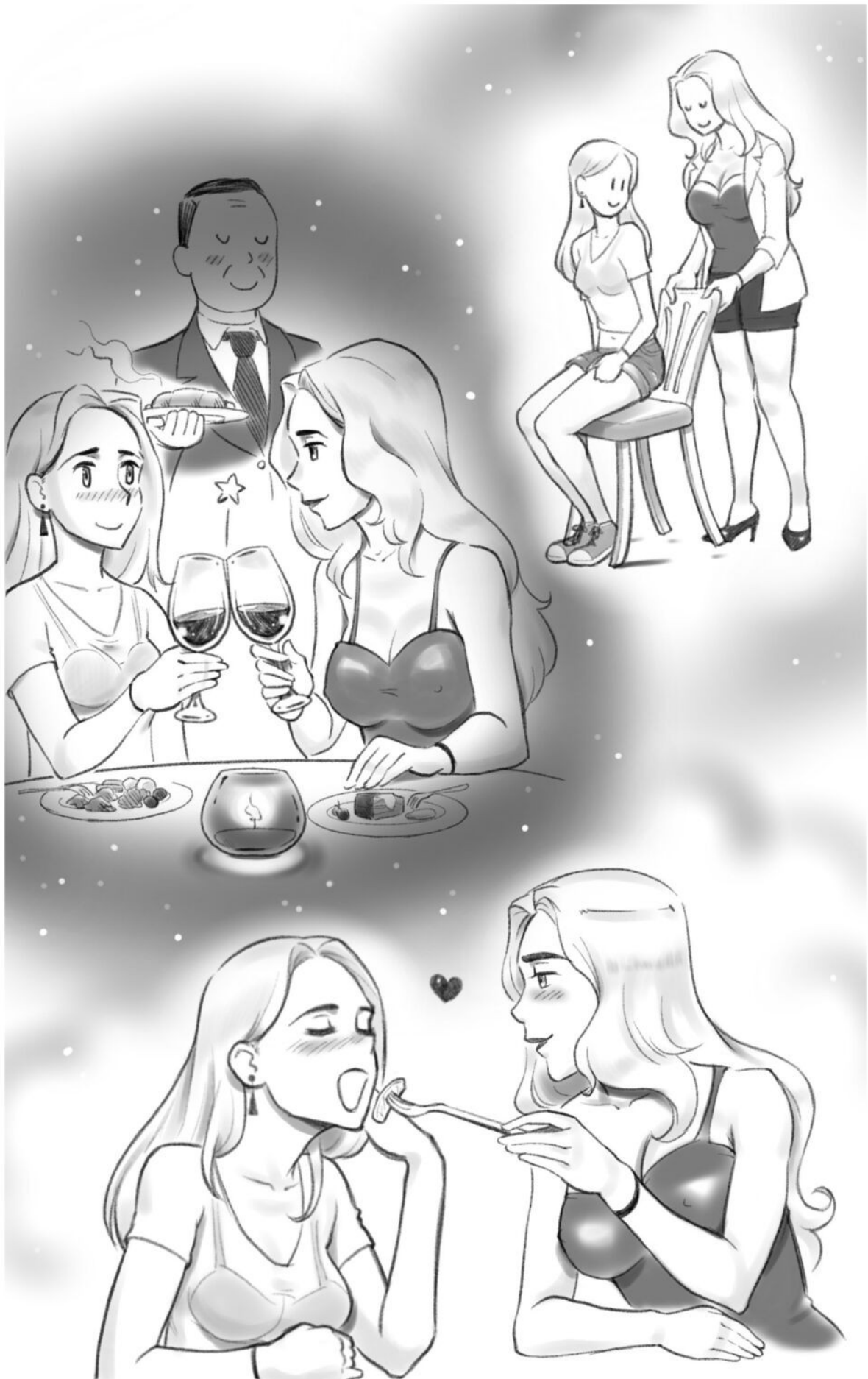
そこでクリスティーナは分かったのです。ーヘルマは完璧でした！彼女はクリスティーナが彼氏にこうして欲しいと思う行動をすべて取ってくれたのです。



まずヘルマは車の助手席のドアを開けてくれました。そんな事くらい普通ですって？ では、彼女たちが街へ繰り出した後、どんな時でもヘルマは必ずクリスティーナの席のドアを開け、ショッピングで立ち寄ったお店でもドアを開けて娘から先に入らせ、歩道を歩く時はいつも車道側を歩いたのはどうなのでしょう？ まるで紳士ようにヘルマの立ち居振る舞いは自然でした。

おまけにイタリアンレストランでは椅子を引いてクリスティーナを座らせ、食べ物や飲み物の注文も娘の希望を優先しました。食事中にクリスティーナが食べ物をこぼして服をちょっと汚した時も、すかさずハンカチを濡らして汚れを落としたし、ワインを注文する時は詳しくないクリスティーナに代わってテキパキ注文しました。彼女は娘を座らせたり立たせたりする時は手を添えましたし、道で水溜まりがあった時はクリスティーナの手を引いて上手に避けさせたのです。

ヘルマは大胆な服装の娘へ向けられるいやらしい男の視線も守りました。それでなくても魅力的なのに、ブラの透けた娘の服装は必然的に男どもの視線を吸い寄せたのです。が、ヘルマはそれを感じた時はすぐに娘の前に立ち、セクハラ視線を遮りました。そして今度は自分が男たちの視線を浴びても、まったく意に介さなかったのです。一度など「黙りなさい」と厳しい態度で突っぱね、相手の男を怯ませたくらいです！ そんな風にされたら根は純情なクリスティーナは、母親である彼女に胸キュンしてしまうのでした。



映画館へ入ると、二人は恋人のように手をつないで座り、ラブロマンスを楽しみました。その映画はシェークスピアの『お気に召すまま』のパロディで、男装したロザリンドがなんと公爵の娘シーリアと恋仲になってしまうのです。男装を解いて本当は女性であることを曝け出したロザリンドに、シーリアは激しいショックを受け、貴女の愛が無ければ死んでしまうと嘆きます。ロザリンドはオーランドーとシーリアを比べ、実は自分も密かにシーリアを愛しているのを知って、意地悪な公爵やロザリンドの父親の手を振り切り、森の中で結婚式を挙げてしまうのです。絶望したオーランドーはフレデリックに慰められ、実は兄が弟を恋慕っていることを知り、ここでゲイカップルが誕生し、そこへ元公爵やら現公爵やらが乱入して、上の下への大騒ぎで幕を閉じるというものでした。ヘルマとクリスティーナは大声で笑い、時にはロザリンドとシーリアの愁嘆場にしみりし、暗闇の中で手をそっと握りました。

「女だって女を好きになって良いべきよ！」

映画館を出ながら、クリスティーナは力説しました。

「女と男だけがカップリングなんて時代遅れだわ。相手に魅力を感じたら男であろうが女であろうが関係ないわ」

「ええ、そうね、ミス・クリスティーナ」

微笑むママが眩しくて、クリスティーナは思わず目を逸らし、思いました。

(…あり得ない！ でも、母親にときめく娘だっているかもしれない…)

夜になると二人は水上公園へ行き、夜空へ打ち上げられる花火を鑑賞しました。

「…さて、ミス・クリスティーナ。今日のデートはどうでした？」



娘の手を握りながらヘルマが問います。

「ええ、ミス・ヘルマ、とっても素敵だったわ。だけど、まだ完璧じゃないと思う」

「あらそう？ 何か落ち度があったかしら…？」

「いいえ、ミス・ヘルマ。貴女は完璧よ。優しくてジェントルマン…じゃなくて、ジェントルウーマンだし、綺麗でチャームングで、とても私を楽しませてくれたわ」

「それじゃあ、何がいけないの、ミス・クリスティーナ？」

「それはね、まだ起こっていない事があることよ」

クリスティーナがジッと母親の目を見つめています。

不意にヘルマは娘の言った事を理解し、動揺しました。彼女は首を振り、

「それはダメよ、ミス・クリスティーナ」

「ダメ？ どうして？ 恋人同士なら当然やるべき事をやるべきだわ」

「だってそれは…ねえクリス、私は貴女の母親なのよ？」

「でも、証明してくれるって約束したわよね？」

「だけど、ねえ、…ああ！ 困ったわ」

「キスはよくても、ベッドはダメなの？」

「シイッ、クリス、誰かが聞いているかも…」

「誰も聞いてやしないわ。周りを見て。みんな恋人同士でイチャイチャしてて、私たちなんて気づかれてないわよ」

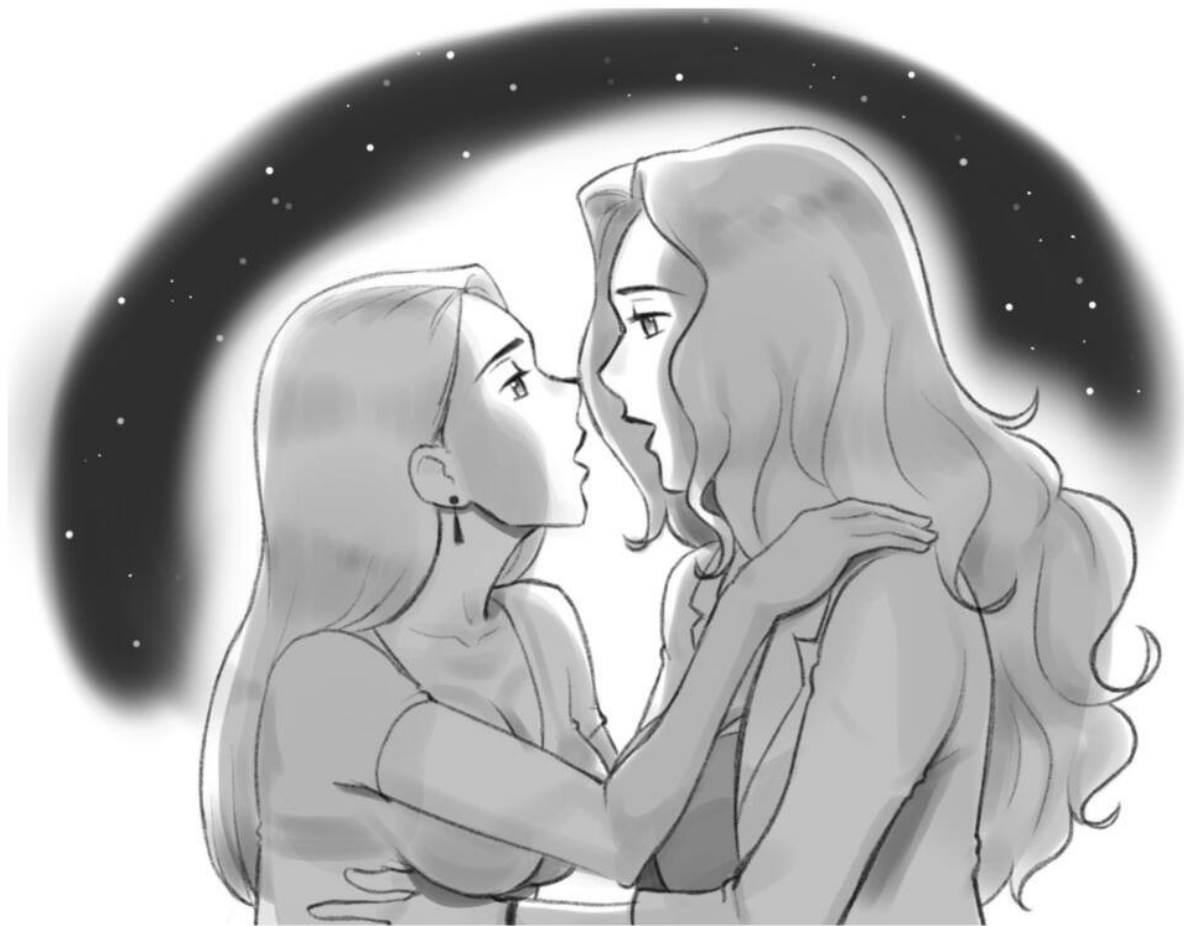
「だけど…」

「…ねえ、ママ、キスして…」

「だめよ、^{スウイーティ}可愛い子ちゃん…」

「お願い、ダーリン…」

美少女のクリスティーナにお願いされて、抵抗できる者がいるのでしょうか。少なくともヘルマには不可能でした。彼女は周りを気にしながら、そっと娘と唇を合わせました。すぐにクリスティーナがヘルマの首に腕を回し、引き寄せて、ディープキスを始めます。そうするとヘルマは降参するしかありません。たちまち湿った音が二つの唇の間から漏れ、母娘は夢中でキスしました。そんな二人を大きな花火の光の華が照らし出します。とんでもなくロマンチックな場面で、血の繋がった母親と娘は熱いキッスに耽っているのです…。



やがて花火が終わり、恋人たちが公園から去ってゆくと、ヘルマとクリスティーナは二人きりになりました。彼女たちは手すりへ体を持たせかけ、互いの手を重ね合わせていました。

ヘルマはまだ決心がつきません。

クリスティーナが大人になったとはいえ、実の母親である自分と寝るのは、不道德のように思えたからです。その一方、自分を『ダーリン』と恋人のように呼んでくれる娘に、どうしようもなくときめいていました。母親の様子を察したクリスティーナは、重ねていた手を握りました。

「さあ、ミス・ヘルマ。決断の時よ」

「…やっぱり決められないわ。今日はここまでにしましょう、クリス」

クリスティーナはわざとらしくため息をつき、重ねた手を離し、クルリと回って、手すりにお尻を預けました。

「それじゃあレッスンはここまでね、ママ？…いいわ、仕方ない。ここから先は私をファックしてくれる男を探して、処女をあげることにする」

「——そんな事は許しませんっっ！！」

公園に響き渡る声でヘルマが叫びます。二人は驚いて固まりました。特にヘルマは自分の大声にショックを受けていました。すっかり混乱した彼女は、しどろもどろに言い訳しました。

「…ああ、スウィーティー、そうじゃないの、誤解よ、私は、そんなつもりで言ったんじゃない…」

ところがクリスティーナの方は、驚きから立ち直ると、これ以上ないほど優しい笑みを浮かべていました。頬を赤くし、母親をうっとり見つめています。

「…ママ、ママ、ダーリン…私に嫉妬しているの？ それとも男の方に？」

「いいえ、クリス、私は…」

「ねえ、どっち？」

ヘルマは諦めて目を閉じ、告白するように言いました。

「…男の方よ」

「私を寝取られたくないのね？」

「ええ。そんな…そんなのダメよ」

「ダーリン…」

クリスティーナはヘルマに寄り添うと、両腕を回して、母親の腰を抱きました。彼女は彼女の目を見つめながら、

「それは、娘の私に恋しているってこと…？」

「ええ。そうかもしれない…いえ、分からないわ。でも…」

その唇を塞ぎ、クリスティーナは母親の唇を吸いました。もうヘルマはたまりませんでした。ギュッと娘を抱き寄せると、クリスの舌を強く吸ったのです。クリスティーナの腕に力がこもり、母親を一層抱き寄せました。ついにヘルマは言いました。

「…ああ、クリス！ 貴女が欲しいわ」

「恋人のように？」

「恋人のように」

「よかった、ママ！ 私、ママに愛されたいの！ ママにバーズンを捧げたいの！ 本当よ。どうしてこんな気持ちになったのか分からないけど、今はママが最高の恋人なの」

「わたしもよ、クリス…いけないことだと分かってる。分かっているのに、あなたを抱きたいの。母親失格だわ」

混乱の極みにいるヘルマに、クリスティーナは囁きました。

「…世界中で一番愛してる、ママ」

「…私も愛してるわ、クリスティーナ！」

再び彼女たちは熱いキスを交わし合い、公園の灯りの届かない暗闇の中で立っていました。彼女たちを照らしているのは頭上の月明かりだけです。銀色の光は幻想的に母娘を浮き彫りにしていました…。

3・「ボーイフレンド」との初夜

帰りの車の中で二人は無口でした。彼女たちはこれから起こるであろう事に対し、それぞれが緊張していたのです。

それでも信号待ちをしている時など、クリスティーナはクラッチレバーを握る母親の手にそっと自分の手を重ねたり、これみよがしにTシャツの上から自分の胸をまさぐり、淫靡な形に盛り上げてみせました。ヘルマはヘルマで手が重なりとニッコリ微笑み、クリスティーナの胸を見つめてゴクリと唾を飲み込みました。そのせいで彼女は一度ならず青信号を見逃し、後ろの車からクラクションを鳴らされたほどです。彼女は時には周りに誰もいないのを見計らい、信号待ちの車内で急いで娘にキスしました。もちろん娘も短いキスで情熱的に応えました。

自宅へ着いた時、時刻はすでに12時を回っていました。

ヘルマは衝動的にクリスティーナをお姫様抱っこの格好で抱き上げました。

「さあ、シンデレラは元の姿へ戻る時よ」

「ええ、生まれたままの姿にね、ママ！」

ヘルマは娘を抱き上げたまま玄関まで運びました。クリスティーナはくすぐったそうに笑い、母親の首に腕を回してキスします。

彼女が娘を下ろしてドアを開けた途端、クリスティーナが襲い掛かりました！ ヘルマを壁際へ追い詰め、キスの嵐を降り注ぎます。もちろんヘルマは熱烈に応えました。彼女たちの横で玄関ドアが自動的に閉まり、カチリとロックを掛けると、もう彼女たちを邪魔する者はありません。

「…ママ、教えて！ SEXについて知ってること全部を！」

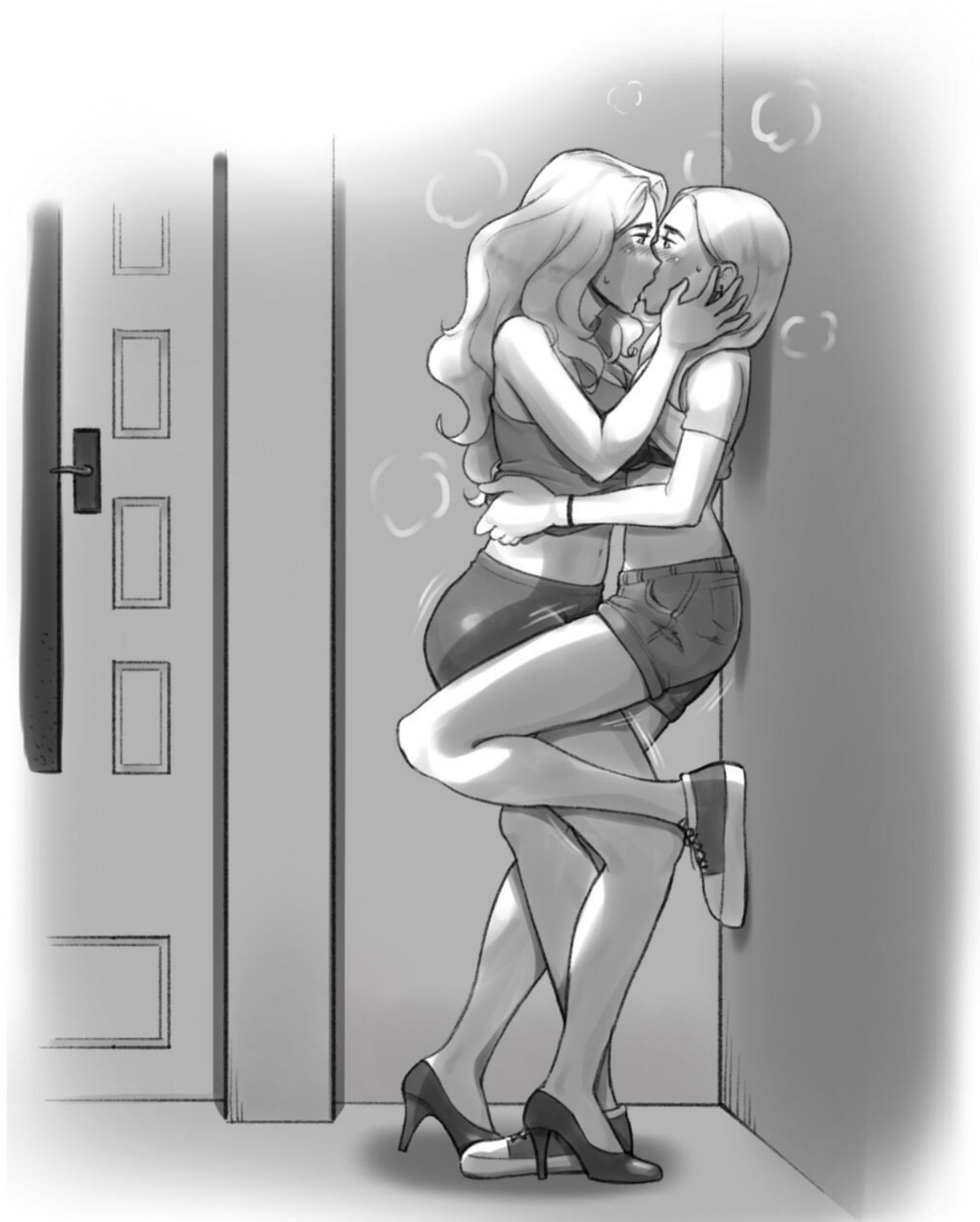
「ええ、ダーリン、望むところよ！」

ヘルマはクリスティーナのTシャツを捲り上げ、息を飲みました。透け透けの真っ赤なブラジャーの下で、すでに勃起している二つの乳首が見えます。なんて誘惑的な眺めでしょう。我慢できず、ヘルマはブラジャーの上から左の乳首を咥えました。空いている右の乳房に手を這わせ、ゆっくりと捏ねます。

「…ああ！ マミー…！」

感極まってクリスティーナは喘ぎました。血の繋がった母親からこんな風に愛撫されることも初めてなら、これほど優しく、エロチックに感じさせてくれる手つきも初めての経験です。実をいうと、クリスティーナはリックとペッティングまでは済ませていました。彼女はリックにキスや乳房を揉むことや下着越しに性器を触らせる行為までは許していたのです。けれどもクリスティーナはその先へ、つまりSEXへ進む気になかなか出来ませんでした。たぶんリックが性急過ぎて、まるで自分が性処理用の女としか見られていないと感じてたからかもしれません。結局今日ドタキャンされたことで、図らずもクリスティーナの直感正しいと証明されました！

ヘルマのタッチはリックなどとは比べ物にならないくらい素晴らしい感触だったのです。まるでもう一人の自分が、性感帯を知り尽くしているかのように、乳房を柔らかに愛撫しているようで



す。ブラジャーがずり上げられ、繊細なタッチで親指と人差し指が勃起した乳首を挟んで捻るかと思うと、大胆に掌がクリス

ティーナの張りのある乳房を驚掴み、捏ね回しました。舌がまだピンク色の乳輪を舐め回し、唇がそっと乳首を摘んで引っ張ります。歯で甘噛みされると、クリスティーナは頭をのけ反らせて快感に呻きました。彼女の脳天へ甘い痺れが走り、それと同時にヴァギナへも届きます。先程から母親との濃厚な接吻を繰り返し交わした後では、クリスの谷間はすぐに濡れそぼりました。

ヘルマは娘を壁へ押し付け、乳房にキスしながらデニムのホックを外し、器用に脱がせてゆきます。その事でクリスティーナは軽い嫉妬を覚えました。

(…ああ！ ママったら、女の人と寝るのは初めてじゃないんだわ。こんなテクニクを知っているなんて…)

愛する母が他の女とSEXしていたかと思うと、カッと頭が熱くなります。けれどもヘルマがクリスティーナの谷間をパンティの上から擦ると、腰が砕けるような快感に襲われ、たちまち降参してしまいました。

「…もうこんなに濡らしているの、ミス・クリスティーナ？ はしたない娘ね」

「ママこそ、ああん！ ほ、他の女と寝たのね…ゆ、許さないから」

「ああ、ダーリン、ごめんなさい！ 貴女がまだ幼い頃、性欲を持て余していたの。男と寝る気になれなくて…」

「ベビーシッターとも寝たのね？ ハア、ハア…」

「チュパッ、んん、そうよ、若い娘に手を出したの。可愛いセフレだったわ。でも、こんな話嫌でしょう？」

「そ、そうよ、とっても嫌よ、だから…ああん！ わ、私をもっと、気持ち良くさせてえ！」

「クリスティーナ！」

感激したヘルマがクリスのパンティを一気に下ろし、股間へむしゃぶりつきました。たちまちクリスティーナはアクメの甘い悲鳴を上げ、母親が割れ目から溢れる愛液を吸る悦楽に身を震わせました。

「マミー、そ、そこはまだ…ああん♥ 洗ってない…汚いわ」

「ううん、とっても美味しいわ。あなたのオマンコはきれいで素敵よ」

生まれて初めて母親から「オマンコ」というはしたない言葉を聞かされ、クリスティーナは激しく興奮しました。その余韻が割れ目からさらに愛液を溢れさせます。

ヘルマの舌はアイスクリームを舐めるように肉の谷間を上下し、膣穴から吐き出される少し酸味ととろみのある液体を掬っては口へ運びます。その間にも両手は乳房を捏ねるのを止めず、上と下の両方で快感を与えていました。クリスティーナは母親の頭を両手で抱え、愛おしそうに髪を掻き回しました。無意識に彼女の腰がヘルマの口へ押し付けられ、もっと快感を引き出そうとします。

ついに白い衝撃がクリスティーナの脳天を貫き、一際大きな声で彼女が叫び、ガックリと腰を落とした娘は母親へしなだれかかりました。

「…信じられない！…信じられない！…」

クリスティーナは吸り泣き、母親が与えた悦楽に酔い痴れました。これに比べればリックの愛撫など乱暴なゴリラに撫でられるようなものです！

ヘルマはクリスティーナを抱きかかえ、居間のソファに寝かせました。娘は下半身を丸出しにし、足を広げて恥ずかしげもなく

股間を晒し、上半身はTシャツが捲れておへそが丸出し、ブラジャーもずり上がって、勃起した乳首が天井を向いています。クリスティーナの全身が薄っすらと汗を掻き、フェロモンに満ちた匂いを漂わせました。

（なんて素晴らしい眺めかしら！）

ヘルマは実の娘の体に感動していました。大きくて形の整ったおっぱい、腰はまだ発展途上で細く、足もしなやかに伸びています。アクメに襲われた顔はたまらなく蠱惑的で、半分閉じた瞼と半開きの唇がこちらを誘っているようです。なにより自分の前で娘が無防備に痴態を晒していることに、ヘルマは興奮を覚え、自慢したい気分でした。

（私の前だからこそ、こんな格好を見せるのも許してくれるのよ！）

思わず近所へ叫びたい衝動に襲われます。

ヘルマは娘の肢体を見下ろしながら、ゆっくりと服を脱いでゆきました。ジャケットを床へ脱ぎ捨て、キャミソールの裾に両手を掛け、ヌードショーのように上へ少しずつ持ち上げると、Hカップの巨乳が下から徐々に現れ、子供を産んだせいで黒ずんだ色素（とはいえ年齢のわりに明るい色でしたが）の大きな乳輪が出現し、その中央に大きな勃起乳首が君臨しています。かつてこの乳首は赤ん坊だったクリスティーナが吸い、そして今夜、再び吸いつくのです。エクササイズによって引き締まった彼女のお腹と、乳房の横の永久脱毛したきれいな腋、それに瑞々しい素肌は、とても36歳とは思えないくらいです。

もちろんヘルマはクリスティーナがこちらを見ているのを計算済みでした。彼女が1枚脱ぐ毎に娘は喰い入るようにこちらを眺め、巨乳の先端が曝け出された時は無意識に舌舐めずりし、肩の

下の腋を欲情に満ちた目で（ええ、きっと舐めたいに違いありません！）見詰めていたのです。

彼女は太股に食い込んでいた超ミニのショートパンツのジッパーを少しずつ下ろし、片足ずつ上げて脱ぎました。その下のパンティを見たクリスティーナはまた唾を飲みました。

（…ああ！ママのクロッチが濡れている）

ヘルマのパンティには滲みが広がり、肉眼でははっきりと分かるほど濡れていたのです。そこだけが灰色の円になっていて、どれだけ彼女が興奮しているか示しています。ヘルマはジッと娘の目を見つめたまま、最後の一枚をずり下ろしました。

「…ママ、凄いわ…！」

思わずクリスティーナは呟きました。

（オマンコが丸見えなんて…凄くいやらしくてセクシー…！）

娘の目の前に、母親の股間が曝け出されています。永久脱毛したヴァギナは隅々まではっきり見え、少しばかり黒ずんだ肉の花弁が半開きになっていました。その中のおしっこ用の小さな穴と、クリスティーナを産んだ穴がはっきりと見えます。膣穴はすでに開き、下の唇から涎が垂れていました。

「あん…♥ ママ、はしたないわ！」

「え、ええ、クリス…ママ、とても恥ずかしいの…♥」

羞恥にヘルマの全身がほんのりと桃色に染まっています。それを見ただけでクリスティーナは微かなアクメに襲われてしまいました。ピクッと腰が浮き、踵が床から浮きます。

そんな娘の痴態を眺め、ヘルマは女豹のように欲望に満ちた視線でクリスティーナの全身を舐め回しました。それから跪き、娘の太股の間に頭を入れると、両手でそっと太股を開脚させ、顔を



濡れた股間へ近づけます。クリスティーナはもう心臓が破裂しそうなほどでした。

「ーーあああ！！！！♥」

クリスティーナが仰け反り、喘ぎました。

ヘルマの舌が柔らかく谷間へ伸び、花卉に触れたからです。舌はピンク色の肉襞を舐め、ヴァギナの形に沿って蠢きました。それからスリットで優しく舌尖を上下させます。クリスティーナはもう喘ぎっぱなし。背中を反らせたまま太股を震わせています。

やがてとうとう舌尖が清いままの膣穴へ達し、中へ潜り込みました。クリスティーナは叫び、ヘルマの両手がしっかり抑えていても腰を跳ね、快樂にのたうちまします。

(ついに娘のアソコを舐めてしまったわ！私は娘に手を掛けてしまったんだわ！なんて素晴らしいの！！♥)

後悔よりもヘルマは自分が産んだ娘のマスコをクンニすることにこの上ない喜びを感じていました。クリスティーナの愛液は甘く、微かに酸味があり、まだ処女らしい初々しさがあります。性の泉から湧く聖液を母親は吸りました。そして無意識に自分のアソコへ手をやり、オナニーを始めたのです。

ヘルマの人差し指が膣穴へ潜り込みました。

最初は第一関節まで。ドアをノックするようにそっと何度も潜らせてます。それから少しずつ、痛みを与えないように埋め込み、指先が処女膜へ接するまで…指の腹が薄膜に接すると、ヘルマは娘がまだバージンなのを確認し、喜びを感じました。

(まだこの娘は清いままなんだわ！まるで私を迎えるのを待っていたみたい)

人差し指が抽送を開始しました。愛液を潤滑油に、濡れた指が最初は優しく、次第に激しく娘の性器を犯します。実の母親に指でファックされながら、クリスティーナは全く抵抗しませんでした。それどころか腰を少し浮かせ、自ら指ペニスを迎え入れます。一突きされるごとに軽いアクメが彼女を襲い、乳首まで達しました。



(わたし、ママにファックされてるんだわ！ 指だけどチンポで犯されるのと変わらないわ！ 気持ち良過ぎて頭がおかしくなりそう♡)

「おう、ママ♥愛してる♥わたし、あなたを愛してる♥…はああああ♥」

うわ言を呟きながらクリティーナは母親の愛撫に身を委ねました。全身が甘い痺れに覆われ、娘は至福の時を味わっています。やがて激しい衝動が子宮の辺りから湧き起こり、クリティーナは大声で泣きながら「イエス！イエス！」と何度も叫びました。そして同時にヘルマの親指がクリトリスの小さな肉豆を擦ると、彼女の体がグッとブリッジを作り、思い切り背中を反らせ、エクスタシーの衝撃に痙攣しました。彼女の頭の中が真っ白になり、クリスティーナは天にも昇る心地でした…。

ようやく悦楽が治まり、クリスティーナは喘ぎ、啜り泣き、ため息を吐きました。

「…とても信じられない！ こんな素敵なことがあるなんて…これが大人になるってことなのね」

「そうよ、ハニー。大人はSEXで大きな喜びを得られるの」

「それは相手がママだからだわ。ママがわたしのマンコを愛してくれたからよ」

「ああ、ダーリン！ そう思ってくれるなら、ママは何度でもあなたのアソコを舐めたいわ！ いけない事だと分かっているけれど、ママは舐めたいの、わたしの赤ちゃん！」

「いけない事じゃないわ！ わたしにはいけない事じゃない。ママが愛してくれるなら、わたしは何でも許しちゃう♥」

「クリス！」

ヘルマは娘を抱きしめ、熱い口づけを浴びせました。クリスティーナも熱狂的に応え、二人はエロチックな蛇がのたうつよう

に足を絡ませ、互いの腰を抱き締めたり、おっぱいを揉んだりしたのです…♥

「リックに感謝しなくちゃだわね」

母親の胸へしなだれかかりながら、クリスティーナはヘルマの乳首を指先で撫で、呟きました。

「彼が振ってくれなきゃ、今頃こうしてママと一緒に居ないんだから」

「後悔していない？母親に犯されて」

「ねえ、ママ、そんな風に言わないで…わたし、ママにファックされてとっても嬉しいの♥ 恋人になってもらって最高のデートをして、それからSEXのABCも教えてもらってるのよ。だけど…」

「だけど、何？」

「…わたしもママを愛したいわ」

「ええ？」

「だって、こんなに美味しそうなおっぱいがあるんですもの。赤ちゃんだった時みたいに、またママのおっぱいを吸いたい」

実際、ヘルマのHカップの乳房は魅力的でした。エクササイズで鍛えているので、彼女の乳房は垂れることもなく、こんもりと挑発的に盛り上り、二つの肉の丘を作っています。クリスティーナは愛おしそうに指で乳房をなぞっていました。

ヘルマは吹き出しました。

「まあ、この子ったら…いつまで経っても赤ちゃんね♥ 赤ちゃんにはミルクをあげないとね♥」

「そうよ、ママ♥ 赤ちゃんにはミルクが必要よ♥ だからママのエッチなおっぱいを吸うの♥」

クリスティーナは柔らかく母親をソファの上に押し倒し、Hカップの巨乳を上から眺めました。頂上に濃い色素の乳輪に囲まれた乳頭が勃起しています。呼吸で胸が上下するたびに乳首がいやらしく揺れ、乳管から今にもお乳が噴き出しそう。薄っすらと汗を掻いたおっぱいを見ていると、クリスティーナは股間が疼いてきました。

彼女はゆっくりと母親へのしかかり、頭を下げると左の乳首へそっとキスしました。ヒュッとヘルマが息を吞みます。娘の唇に触れられた瞬間、乳房の先端から軽い電流が走ったのです。でもそれは、ほんの手始めでした。



クリスティーナは唇を開き、舌先を母親の乳首へ触れさせました。コリコリした肉豆を彼女の舌でほじくり、乳輪を舐め回し、チュッチュッと軽く吸います。レズSEXは初めてでしたが、クリスはどうすればいいのか本能的に分かっていました。

クリスティーナは空いた方の右の乳房を左手で包みました。そして根本から搾るようにソフトに握り、押し上げ、たっぷりしたバストを捏ね回します。

「…ああん♥ クリスウ♥」

ヘルマが身を振ります。腰をいやらしく蠢かせ、股間の疼きに耐えるように太股を擦り合わせました。

（赤ちゃんの時おっぱいを吸わせた娘が、今また吸っている！
とってもいやらしい吸い方で！ ああ、たまらないわ！）

度々レズSEXを経験していたヘルマですが、今日のクリスティーナの愛撫は格別でした。彼女の手つきは辿々しく、キスもまだ遠慮がちですが、むしろその初々しさがかえって母親の興奮を呼び覚まします。ヘルマはのたうち、娘の頭を撫でながら、もっと愛してと胸を押し上げて催促するのでした。

クリスティーナは両方の乳房を時間を掛けてたっぷり舐め、吸い、味わいました。乳首を甘噛みすると、ヘルマは小さな叫び声を上げて仰け反りました。自分が母親へ快感を与えているのを知ると、クリスティーナは激しく興奮し、淫らな気持ちになりました。いつもはキリッとしているヘルマが、この時ばかりは顔を惚けさせ、実の娘の愛撫に手も足も出ないのです。白旗を揚げ、クリスティーナに全面降伏していました。

おっぱいを堪能した後、クリスティーナは舌を徐々に下の方へ滑らせていきました。お腹の真ん中の溝を舌先で掘り、おへそを軽くほじります。それだけでヘルマは喘ぎました。

クリスティーナはソファから降りると、床へしゃがみ、母親の太股に手を掛けて、優しい仕草で開かせました。太股の扉が開き、神秘の谷間が彼女の目の前へ現れます。

ヘルマは顔から火が出るほど恥ずかしさを覚え、両手で顔を隠していました。

「…あんまり見ないで！ 恥ずかしいわ」

「ううん、恥ずかしいなんて、そんなことないわ、ママ！とっても素敵なオマンコだわ♥ 毛が一本もなくって、ツルツルのマンコに綺麗な割れ目があるわ。…ねえママ、どうしてこのヴァギナはこんなに開いているの？ 膣穴まで見えるわよ」

「意地悪な娘ね！ そんな事聞かないで」

「ここから私が出てきたのね…不思議だわ…今、このマンコは唇を開いて私を待っている…トロトロの白い液が垂れて床を汚してるわよ、ママ…♥」

「ああ…許して、クリスティーナ」

自分の痴態を赤裸々な言葉で責められ、ヘルマは羞恥に顔が赤くなり、同時にその分だけ興奮しています。

クリスティーナは微笑み、唇を近づけて、先ほど自分がされたように、母親のヴァギナを愛撫し始めました。たちまちヘルマが降参の叫び声を上げ、悦びの悲鳴を歌いました。

クリスティーナの舌が愛液を掬い取り、舐め、吸ります。彼女が色素の着いた肉弁をベロベロと舐め回し、唇に挟み、すでに勃起していたクリトリスに吸い付いて舌で弾くと、途端にヘルマの腰が大きく浮き上がり、ブリッジを作って痙攣したのです。あまりの衝撃に叫ぶことも出来ず、ヘルマはほとんど失神していました。

「まあ、ママ、大丈夫！？」

母親の反応の激しさにクリスティーナの方が驚きました。心配する娘へ、ヘルマは荒い息をしながら微笑み、首を振りました。

「クリス、愛しい子、ママはあなたに全面降伏したわ。お帰りなさい、ダーリン…」

「…まあ、ママ！」

クリスティーナは感激し、ヘルマに抱きつくときスの嵐を浴びせました。それから股間への攻撃を再開し、指も使って、思いつく限りの愛撫を与えたのです。もちろんヘルマは痴態を曝け出し、思い切り嬌声を上げると、何度も何度もエクスタシーを味わっていました…。

エクスタシーの嵐が過ぎると、ふたりはソファの上で抱き合って休んでいました。足を絡め合い、娘が上になってしなだれかかり、互いの巨乳が合わさっています。心地よい疲労感に身を任せ、ヘルマとクリスティーナは今日の驚くべき体験を反芻していました。

「…ねえ、これってきっと偶然じゃないんだわ…」

クリスティーナがため息のように言います。

「私がリックに振られたのは、きっとママに愛されるための前振りだったのよ」

「そうかしら…私はむしろ、クリスティーナが私を愛してくれるために、神様がリックに浮気をさせたのだと思うわ」

「女の人がこんなに良いなんて…♥」

クリスティーナの指がヘルマの肌を滑ります。30代半ばなのに母親の肌は肌理が細かく、弾力を保っていました。腰つきは逞しく、お尻もおっぱいも大きく、涎が出そうなほど。自分が大人になったらこんな女性になりたいという願望がすぐ横にあるのです。

一方のヘルマは娘の若々しい肉体が羨ましく、完璧な乳房の形やまだ脂肪で崩れていない均整の取れた肉体を驚嘆の目で眺めていました。自分の少女時代はこんなに完璧ではなかったと思ったのです。ヘルマはそれなりに努力して肉体を築き上げたつもりですが、それでも自然な若さにはとても敵いません。なにより、薄い恥毛の陰に隠れた娘の股間を見つめていると、嫌でも欲情が湧いてくるのでした。

「あなたほど魅力的な女性を抱いたことがないわ、クリス」

ヘルマは真面目に言いました。

「嘘ばかり。ママは女の人とも経験豊富なんでしょ？ 私みたいな小娘じゃ…」

「いいえ、あなたがNo. 1よ。男の人と比べても、今までのSEXで一番だわ」

「ママ…」

再び欲情が湧き起こり、クリスティーナはヘルマにキスしました。ヘルマはクリスをひっくり返し、体を動かすと娘の股間へむしゃぶりつき、同時に自分の股間を娘の顔へ押し付けました。すぐにクリスティーナが反応し、ヘルマのスリットを舐め始めます。ヘルマも娘のヴァギナを舌と指で攻めました。互いの攻防は長い時間続き、喘ぎ声とアクメを生み出し、舌が疲れるまで二人は慰め合いました。



「…ねえ、クリスティーナ、女はこういうこともできるのよ…」

起き上がったヘルマが妖しげな微笑を浮かべ、体位を入れ替えます。再びクリスティーナの足を開かせ、その間に自分の足を潜り込ませました。クリスティーナが母親の意図を理解し、軽く腰を浮かせました。

「…ああ！」

彼女が呻めきます。

「ママ、わたしとあなたのプッシーがキスしてる！」

「そうよハニー。貝が開いてキスするの。こうやって…」



濡れそぼった二つの肉ビラが擦れ合い、淫らな音を立てます。開いた陰唇が互いを迎え入れるように蠢き、その間から愛液が泡立ちました。たちまちクリスティーナは貝合わせの虜になりました。

「マンコ同士がファックし合ってるわ、ママ！すっごく気持ちイイ！これ、好きに、んう♥、なりそう」

「もっと動かしなさい、クリス。ママをファックっ、ん、するつもりでえ♥」

「そうよ！ママをファックするの！ファックしちゃうのお！」

娘は熱狂的に腰を振り出しました。今の発言が彼女の征服欲を刺激したのです。対する母親も剣を交えるように股間で迎え討ち、ふたりは喘ぎながら汗みずくで攻防を繰り返しました。エクスタシーを感じた方が負けです。けれども勝った方が執拗に腰を振り続けて自分も轟沈してしまうので、たちまち次の対戦が始まるのでした。ふたりは互いのプッシーに打ち負かされ、悦びにのたうち、潮を噴きながら、相手の名前を呼んで、愛を叫び合うのでした…。

4・私の処女はママのもの

狂宴が終わると、もう12時を過ぎていました。

二人は一緒にバスルームへ行き、シャワーを浴びました。その時もヘルマは後ろからクリスティーナを抱き締め、ボディソープをいやらしく娘の全身に塗りたいく、シャワーを浴びながら軽く指でイカせました。

バスルームを出るとヘルマは空調の温度を上げ、冷凍ピザを温め、即席スープを作りました。クリスティーナはムード音楽を低いボリュームで流し、スパークリングワインを冷蔵庫から取り出して、ワイングラスへ注ぎます。二人はダイニングルームでグラスを打ち鳴らして乾杯し、ピザに舌鼓を打ちました。

二人は生まれたままの姿でした。身に一条も纏わず、全裸のまま食事をします。向かい合ったヘルマとクリスティーナはそれぞれの肉体を欲情に濡れた瞳で見つめています。テレビよりも互いの体こそが味を深めるのです。ヘルマはスパークリングワインを口に含み、クリスティーナを抱き寄せて娘の口へ流し込みました。もちろんクリスは喜んで飲み干します。今度はクリスティーナが生クリームを母親の乳首へ塗りたいく、妖しく舐め取りました。

お腹が一杯になると、二人はすっかり寛いだ気分になりました。そして、まだまだ睡眠を摂る気にはなれませんでした。

「ーさあ、今日の仕上げよ、ミス・ヘルマ」

クリスティーナは立ち上がり、形の良い乳房を押し上げながら腕を組みました。

「ママは私をファックしなくちゃだわ。処女を奪う義務があるの、私のボーイフレンドとして」

けれどもヘルマにはまだ僅かなためらいがありました。

「…ねえハニー、また今度にしない？もう遅いし、それに…」

「反論は無しよ、ミス・ヘルマ」

厳しくクリスティーナは言いました。そして同時に、これからする行為への期待に彼女は小鼻を膨らませています。

「ねえママ、私は今日最高のSEXがしたいの。それはママじゃなくちゃ出来ない事なの。私はねえ、もうどんな男にも…ううん、どんな女にも、私の処女を奪われたくない。私が処女を捧げたいのは、ママひとりなの。愛してるの、わかる？」

「後悔しない？これが男だったらっていつか思う日が来るかもしれないわ」

「先の事より今の事よ！それともママは私を抱きたくないの？バージンなんかいない？」

「いいえ、とんでもない！もちろん物凄く欲しいわ！誰にも奪われたくないのはママも同じ…だけど痛いよ、とっても？」

「あら、それなら尚更よ。ママは私に痛みを刻み込まなきゃ駄目。あなたが私に痛みの記憶を植え付けて、『自分のバージンを奪ったのは自分の母親なんだ』っていう最高の証を、私に与えるべきなのよ！」

「ダーリン！！」

感極まってヘルマはクリスティーナに猛烈な接吻を贈りました。クリスティーナは母親の腰を抱き締め、そのお尻をギュッと両手で鷲掴み、自分の股間を押し付けました。

ヘルマはその逞しい腕力で王子様がするように娘をヒョイと抱きかかえ、微笑みました。

「…さあ、ミス・クリスティーナ、最後のレッスンよ♥」

ベッドルームへ到着すると、ヘルマはわざと乱暴に娘をベッドへ放り投げました。「きゃっ」と可愛い声でクリスティーナが叫びます。乱暴に扱われ、彼女はかえって興奮しました。逞しい母親に今から処女を奪われるのです！

（私、母親に犯されるんだわ！母親に犯されるんだわ！母親に犯されるんだわ！）

同じ言葉がグルグルと脳内を駆け巡ります。早くもクリスティーナの股間は濡れぞぼり、太股は開脚して、しどけない肉体をベッドの上で晒していました。クリスティーナが防御するつもりは微塵もないのは明らかです。

クリスティーナは自分がリックに期待していたことよりも、母親の方が遥かに胸をときめかせられるのに驚いていました。これまでの事と考え合わせると、彼女はまさに母親の恋人になるべく運命づけられたのだとしか思えません。

リックにしようとしていたことより彼女は大胆な振る舞いをしました。自ら太股を開脚し、誘うように踵をベッドの上で擦らせます。それでいて急に太股を閉じ、処女の乙女らしい恥じらいを見せるのでした。もちろんそんな彼女の仕草は、母親をその気にさせるのに十分過ぎるのでした。

ヘルマはクローゼットの中の小箱を開け、奇妙な品物を取り出しました。それはストラップ・オン・ディルドーでした。

薄いピンク色のそれは現実のペニスとは似ても似つきません。形はよりシンプルで機能的、それでいて可愛らしく、グロテスクな感じはありません。もちろんカリ首はしっかりあって、その上クリトリスを愛撫するための小さな突起まで着いていました。



♥射精機能付きストラップオン・ディルドー♥
Strap on dildo that can ejaculate

射精口
Ejaculation hole

膣圧スイッチ
Vagina blower



yes.
You can try
to have a baby♥

精液タンク
Semen tank

輸精ポンプ
Infusion pump

★ Please contact
CALLOT LAB
co.

ディルドーのもう一方の端は握りの部分になっているのと同時に、小さなディルドーとしてヴァギナに挿入することが出来るの

です。誰かがこれを自分のマンコに差し込み、擬似ペニスを勃起させた状態でお相手の彼女へ挿入します。ディルドーの根本にはゴルフボール大の膨らみがあり、ここはミニタンクになっていました。この中へ白濁液に似たローションを注入すると、射精することが出来ます。膣にゴルフボールを挿入した状態で、力を入れると、膣道がボールを圧迫して、大きなディルドーの亀頭の割れ目から勢いよく白濁液が飛び出る仕組みでした。それにストラップで固定すれば、激しい動きも出来るようになります。

ヘルマはこの変わったディルドーを愛用していました。キャロット・ラボ社製のそれは特殊なシリコンで出来ていて、他の製品に比べて抜群の滑りやすさがあります。メンテナンスもし易く、ヘルマは毎回オナニーをこれで楽しんだ後、丁寧に洗っていました。彼女は6インチのサイズを選びました。愛用の8インチでは処女にはきつ過ぎると彼女は思ったのです。

ディルドーと一緒にローションも取り出し、ミニタンクへ注入すると、いよいよ装着です。ヘルマが小ペニスを自分のヴァギナに挿れると、それだけで軽いアクメを覚えました。彼女の方も臨戦態勢が出来上がっていたのです。

ストラップでディルドーを装着し、しっかり固定しているのを確かめると、ヘルマは股間の勃起したペニスを見せびらかしながら、クリスティーナへ歩み寄りました。

「ねえ、ハニー、今からあなたの膣（なか）にコレが入るのよ。どう？」

「素敵だわ、ママ」

クリスティーナはうっとりと答えました。

エクササイズで引き締まった巨乳巨尻の体に、勃起したペニスが物の見事に映えます。女の肉体に肉棒が似合うとはクリスには意外でしたが、とても魅力的な眺めに思えました。

（ママのチンポが私をファックしてくれるんだわ！）

ヘルマはベッドサイドへ擦り寄り、ディルドーを娘の眼前に突きつけました。

「さあミス・クリスティーナ、初夜の時に女がまずする事を知ってるかしら？」

「当然ですわ、ミス・ヘルマ」

クリスティーナは起き上がり、ベッドの端に座ると、ピンクのペニスを手にしました。

経験はありませんでしたが、ネットでSEXの仕方くらいもう学習済みです。それに女友達の自慢話を聞いていたので、男が（この場合は母親ですが）フェラチオをどれほど嬉しがるか知っていました。

「たっぷり濡らしてね。スムーズに動くように」

ヘルマが注意しました。いくらこのディルドーが優れていようと、潤滑油のない状態で挿入するのはヴァギナにとって危険です。彼女はいやらしい気持ちだけで言っているのではありません。

クリスティーナは母親の顔を見上げながら、まず舌先で亀頭をチラッと舐め、それからヌルヌルと肉棒の周囲へ舌を絡めました。出来るだけ淫らに見えるよう、挑発的な表情で、擬似ペニスを妖しく舐め回します。娘の淫らな姿を母親は小鼻を膨らませて眺めていました。

（クリスったらなんてはしたなくて、可愛いの！今すぐ犯したいわ）

それでもヘルマは我慢し、唾液がディルドーへ塗りたいくられるのを待ちました。

ついにクリスティーナは肉棒を咥えました。本物のペニスをしゃぶるように、ゆっくりと頭を動かしながら、チンポを出し入れます。その間、片時も母親から目を離しません。

「…ああ！」

ヘルマは低い声で呻きました。自分の膣に入れた小ディルドーが、クリスティーナの唇の動きを伝えてくるのです。反対に自分が娘の口に犯されているようで、ヘルマは激しい興奮を覚えました。クリスの頭を両手で掴んで、激しく腰を揺さぶりたい衝動を、辛うじて彼女は抑えました。そのかわり軽く両手で娘の頭部を挟み、彼女のリズムに合わせます。

クリスは頬をすぼませ、強くバキュームしながら、口中で舌をピンクのペニスに絡めていました。初体験ながら彼女のフェラテクニクは完璧でした！

（このチンポ美味しいわ！）

本気で彼女は思いました。シリコンのペニスなのに、それは本物の母親のペニスのようでした。このチンポに処女を捧げられると思うと、クリスティーナは震えるほどの歓喜を覚えたのです。

やっとペニスから唇を離れたクリスティーナを、ヘルマは柔らかに押し倒しました。そしてダブルベッドの上で太股を広く開脚させ、ペニスの先端を初々しい割れ目に当てがいました。彼女は何度かレズSEXを経験しているので、膣穴の位置はよく知っています。

ヘルマはクリスティーナを見下ろし、真剣な顔で言いました。
「…覚悟はいいのね？」

クリスティーナは黙って頷きました。心臓が跳ね打って喉から飛び出しそうです。まだ誰も分入ったことのない谷間にヒヤリと冷たい亀頭が当たっています。

ヘルマは、娘の目をジッと見つめながら、腰をゆっくり押し出しました。

「……はぁ！」

何か、圧力を持った物が、クリスティーナの膣口を、押し広げてゆきます。それは普段クリスがオナニーに使う自分の指とは比べ物にならないほど太い物でした。クリスティーナは息を呑み、こらえました。ヘルマの亀頭はますます膣穴を広げます。一瞬、クリスティーナは膣が裂けるのではないかと恐怖しました。ヘルマもそれはよく分かっていて、娘の性器が傷を負わないか慎重に様子を見ながら腰を進めていました（彼女も娘以上に緊張していました！）。ペニスは少しずつ膣道へ潜り込み、奥へ奥へと進入してゆきます。

「クリス、苦しくない？」

ヘルマが、眉をひそめて耐える娘に問います。クリスティーナは返事の代わりに頷きました。

とうとう亀頭が何かの障壁に押し当たり、停止しました。処女膜へ達したのです。それはクリスティーナにも感じられました。胎内でピリッとした痛みと圧力が発生しているのです。

「クリスティーナ、もし痛いなら…」

「…大丈夫…ママ…続けて…」

健気に耐える娘に、ヘルマは逡巡しましたが、思い切って腰を突き出しました。ビリッと何かが裂けるような激痛がクリスティーナを襲い、彼女は体を突っ張らせて悲鳴を堪えました。

ヘルマのヴァギナに挿入された小ペニスが、娘の処女膜を破ったことをダイレクトに母親の膣へ伝えます。ヘルマは娘の痛みを

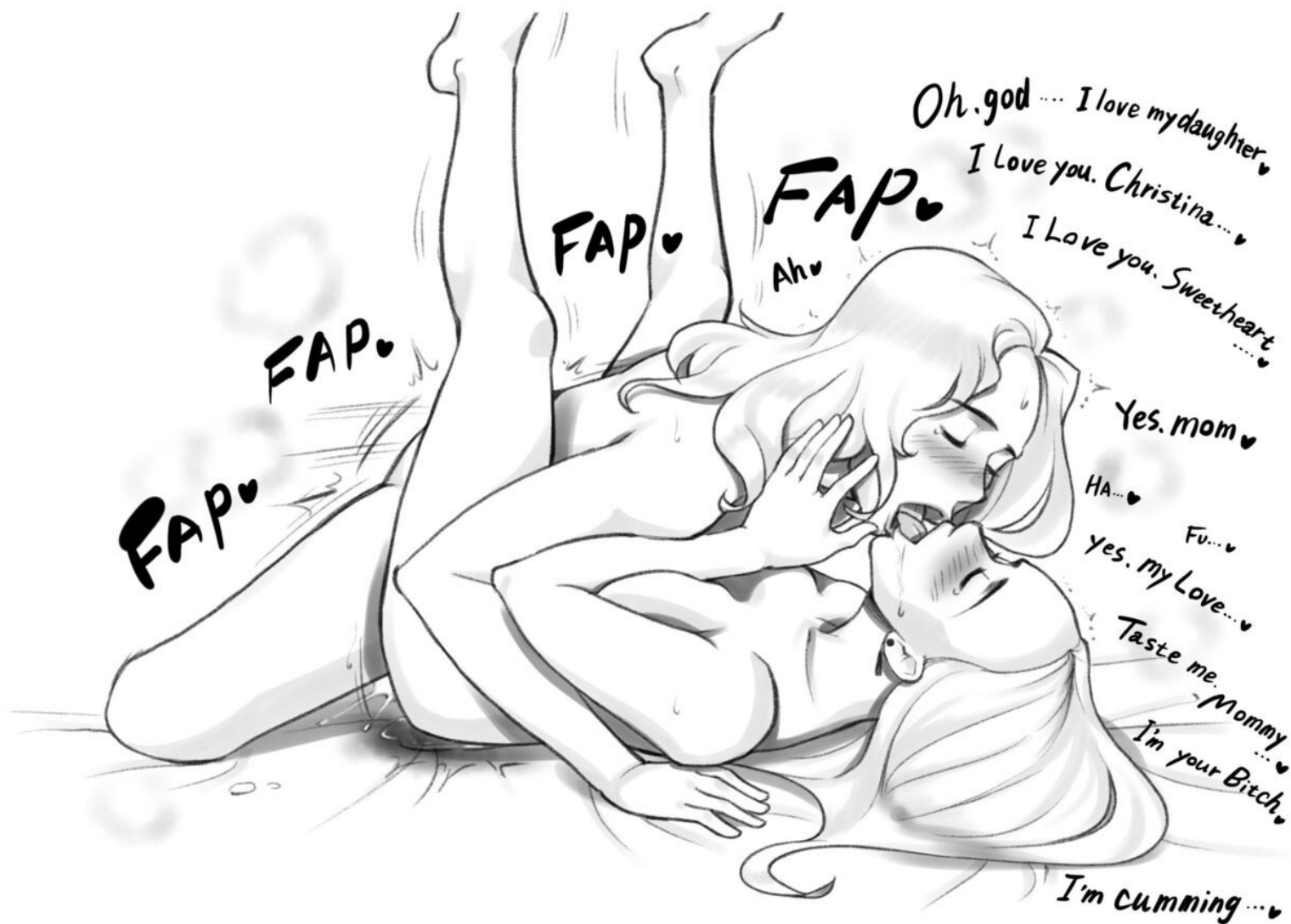
自分の事のように感じ、同時に激しい興奮を覚えました。このまま腰を動かして抽送したいところを堪え、彼女はそのまま停止して娘が耐え抜くのを待ちました。

「ダーリン、分かる…？今、ママはあなたのバーจินを奪ったのよ…」

クリスティーナの両眼から涙がこぼれ落ち、彼女の唇が微笑みました。

「…愛してるわ、ママ！この日は永遠なんだわ」

「おお、クリスティーナ！！」



ヘルマはかがみ込み、キスの雨を降らせました。それは愛の祝福でした。ヘルマは娘の痛みを和らげようと体中を愛撫しました。腰を動かさず、乳房にキスし、揉み、乳首を舐め、首筋や腋を舐め上げます。たちまちクリスティーナは母親の舌にうっとりし、全身に快感が走りました。

「ああ、ママ、あなたって最高の恋人よ…！」

クリスティーナの膣道の壁から愛液が湧き、溢れ、満ち、潤いました。太いペニスで塞がれているにも関わらず、膣口からトロトロと流れ、尿道口から少し小水が漏れました。母親の愛撫によって刺激された神経が分泌物の注入を促し、それによりディルドーの摩擦と破瓜の痛みは薄れ、娘を夢見心地にさせるのです。のみならず、クリスティーナの肉体は本能の命ずるまま膣壁を蠕動させ、ヘルマのペニスを子宮へ導くべく、きつく咥え込んだのでした。

(感じるわ！私のマンコが、彼女の膣が準備出来たって伝えている)

ヘルマはようやく腰を動かし始めました。それは奇妙な経験でした。本来なら彼女が絶対に味わえないはずの悦楽を、今ここで享受しているからです。娘の膣の窮屈さと、それに伴う快感は、得も言われぬものでした。自身が女であるにも関わらず、ヘルマは男性のめくるめく陶酔を理解していました。

クリスティーナの腰が、母親の腰に合わせて動き、広げられた太股と連動します。それと一緒に形の良い乳房が互いに反対の方向へ円運動し、天井を向いた乳首が蠢きました。若い娘は目を閉じ、母親が与えてくれる快楽に身を任せていました。唇が半開きになり、無意識に舌がそれを舐めます。頬はリンゴのように真っ赤。汗に濡れた額や、胸や、首のつけ根や、広げられた両腕の下、脇が光っています。それは素晴らしい眺めでした。若い女神が

幸福に酔い痴れてるのです。ヘルマは血の繋がった娘の処女を奪い、征服した喜びに有頂天でした。娘の痴態を眺めているだけでエクスタシーを感じてしまうほどに。

「…ああ！…ああ！いいわ！そうよ！もっと…もっとファックしてえ♥」

信じられないことにクリスティーナは初体験で早くもアクメを感じていました。普通なら達することのない高みへ昇ってゆくのです。

「愛してる…愛してるわ、ママ！だからファックするの！私を犯すの！私を征服するの！私を雌犬にするのお！」

「クリスティーナ、わたしの娘！きっとそうするわ！ええ、ファックするわ！あなたを私の女にするわ！！」

徐々に彼女の腰の速度が速まり、抽送がリズムカルになります。ピンクの肉棒が膣道から愛液を掻き出し、シーツに大きな滲みを広げました。そしてヘルマのマンコもしとどに濡れ、小ペニスを咥え込んだ谷間の下で同じように染みが広がり、娘のそれと混じりました。

「ファアアアアツツツツツツツツツツしてええええええええ♥♥♥」

クリスティーナは半狂乱になって叫びました。彼女が背中を反らせ、無数の小さなアクメが体の中で爆発しています。それでも快感はとどまるところを知らず、どんどんボルテージを上げてゆきました。クリスティーナは恐怖し、歓喜していました。

（ママに犯されるなら死んでもいいわ！！！）

一瞬、そんな考えさえ彼女は浮かべました。

「ああ、ママ、わたし死ぬわ！死んで生き返るわ！ママにファックされて昇天するわ！！」

「一緒よ、ハニー、一緒に逝きましょう！！昇天しましょう！！」

腰を叩きつけながらヘルマも叫びます。二人は互いの手を握り締め、見つめ合いながら最後の坂道を駆け抜けました。峠の頂上へ達した瞬間、ヘルマとクリスティーナは同時に叫び、震え、昇天しました。ヘルマの膣がゴルフボールを力の限り握り締め、搾ったので、内蔵された白濁液が亀頭の穴へ向かって勢いよく流れ、射精口から密着した子宮口へ噴き出しました。ヘルマのスペルマはクリスティーナの子宮壁に激突し、胎内を濡らして、たっぷりと注がれたのです。もしも本物の精子が入っていたら、クリスティーナは確実に妊娠していたでしょう。彼女の体は120%ヘルマを迎え入れたのですから。

射精しながら何度も何度もヘルマの腰が打ちつけられ、お尻に笑くぼを作り、最後の一滴まで娘の子宮へ注ぎました。

ついに禁断の初体験を完遂した母親はガックリと項垂れ、娘へ覆いかぶさりました。娘は母親をしっかりと抱き締め、まだ膣内に挿入されたままの母のペニスを感じながら、彼女の腰へ自分の両足を絡めました。

（できる事ならママの子供を妊娠したい！ママの子供を産みたいわ…♡）

二人はうわ言のように「愛してる」を繰り返し、キスし続けました。密着した肉体の間に汗が溜まり、狂熱が徐々に穏やかな温かさへ変わってゆくのでした…。

「ーー…ねえ、ママ、これってやっぱり運命なんだろうわ」

母親の腕に抱かれながらクリスティーナは言いました。

「ええ、そうね、クリス…」

娘の髪を撫でながらヘルマが頷きます。

「わたし、だから、ママの彼女にならなくちゃいけないんだわ。
これからは本物の恋人に…ねえ、どう思う？」

「それでいいの、クリス？他の男の子とおつき合いしたいとは思
わないの？あるいは女の子と。ママはもう40歳近いのよ」

「あら、年齢なんて！ママは完璧な女性だわ。わたし、歳上の女
性に愛されるのがきっと好きなの。もちろんママ限定だけど」

「そうね、嬉しいわ。だけれど、他の女性も素晴らしいのよ。あ
なたも経験してみたら？」

「もう、ママったら、わたしを独占したくないの！？」

「とんでもないわ、クリス。もちろん独占したいわ。あなたをわ
たしの雌^{ビッチ}犬にしたい」

「ね、そうでしょ？」

「だから、あなたが良ければ、次はドギースタイルを試したい
の」

「わお！それって何？」

「ワンちゃんみたいに後ろから突くのよ」

「素敵！それ教えて、ママ」

そこでヘルマは色々な体位をクリスティーナと試しました。

バックからチンポで娘のマノコを犯すのは、目も眩むような体
験でした。若くて形の良いお尻を眺めながら、思う存分ヘルマは
チンポで突き続けました。クリスティーナはそれこそ子犬のよう
に鳴きながら何度も絶頂を迎えていました。

お次は騎乗位。クリスティーナは母親に跨り、乗馬を楽しみま
した。

「この格好、好きに動けて良いわ♥」



初体験なのにクリスは積極的に腰を振り、快楽を楽しみました。

その次はヘルマが上体を起こしてクリスティーナを抱き締め、互いに向き合いながらSEXする対面座位です。母親に突き上げられながら、激しくキスし、クリスティーナは母への愛情がドンド

ン鰻登りになるのをかんじていました。そしてもちろん彼女の脳天へも快感が突き上げています。

（ママがいなくちゃダメよ！ママがファックしてくれなくちゃ！）

おしまいはい少し難しい体位。

ヘルマは娘を抱え上げ、立ったままペニスを差し込み、激しく腰を突き上げました。そうするとクリスティーナの全体重が膣道に掛かり、凄まじい快楽を生み出すのです。クリスティーナはほとんど失神したまま母親のファックを堪能しました。ヘルマが射精した時、あまりの快感に失禁してしまったほどです。

「ああ、ママが彼氏よ！ママでなくちゃいけないの！わたし、これで本物のママの恋人ね♥」

「そうよクリス！このマンコはママだけのものよ！私たちはカップルになるの！」

答えは甘く狂おしい絶叫と痴態でした。それはいつまでも続くかと思うほどベッドルームに響いたのです…。

5・完璧なカップル

「さあ、クリス、今度はあなたがママを犯す番よ…♥」

ベッドでお尻を突き出しながら、ヘルマは少し恥じらいつつ言いました。

クリスティーナは例のストラップオンを自分の腰に装着し、興奮で小鼻を膨らませながら、母親の巨尻とマンコを眺めていました。それはほとんど視姦でした。我が娘にいやらしい目で眺められ、ヘルマは何もされていないのに股間を濡らしていました。

「まあ、ミス・ヘルマ、どうしてこんなに濡れているの…？」

指で軽く触れながら、クリスティーナが挑発的に言います。

「そ、それは、ミス…クリスティーナ。あなたに見られて、興奮しているからです…」

「あら嫌だ、母親が実の娘にマンコを見られて盛っているのね？
なんてふしだらな女なのかしら」

「はい、ミス・クリスティーナ。わたしはふしだらな母親で、自分の娘に欲情しているのです」

「合格です、ミス・ヘルマ。ご褒美に今からあなたをファックします」

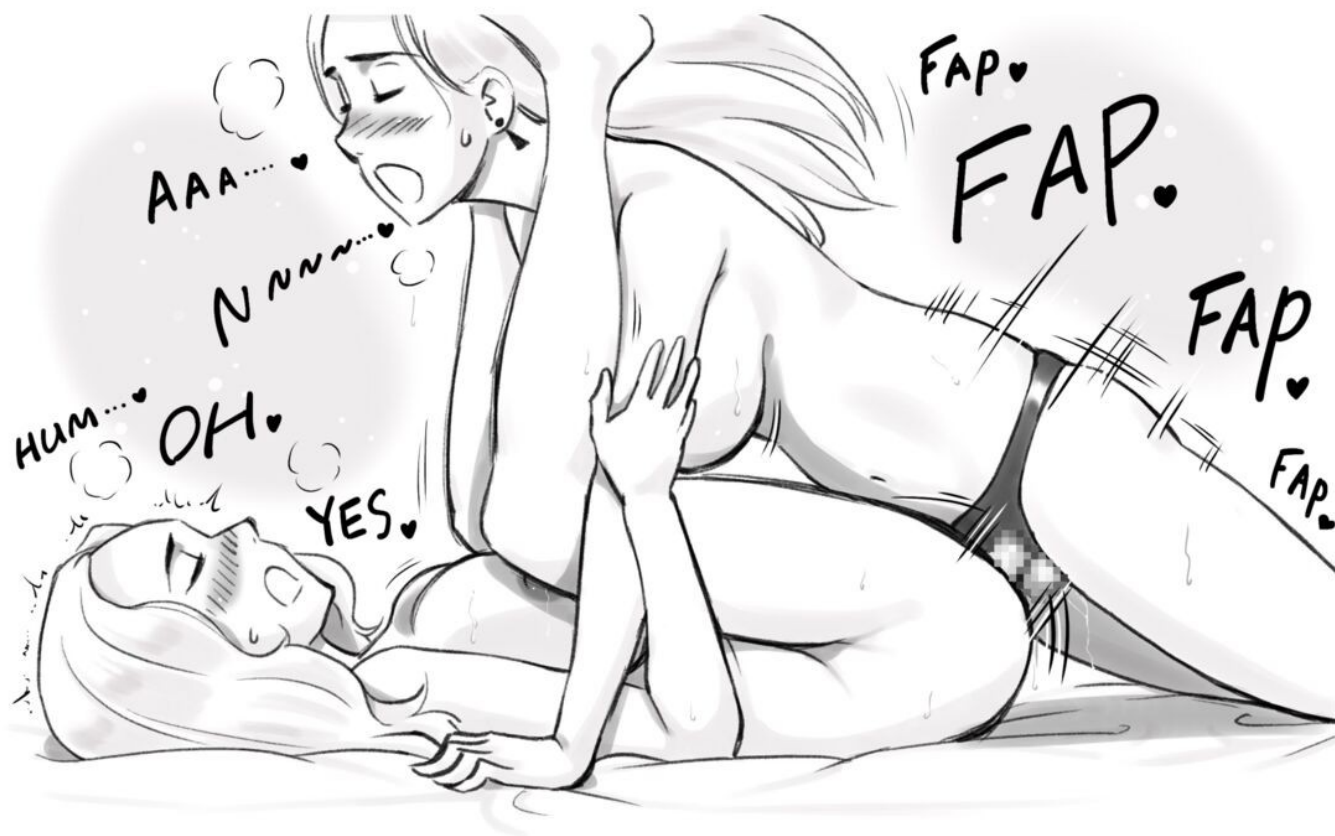
「ああ、ありがとうございます、ミス・クリスティーナ！早くファックして！」

クリスティーナは母親の手の導きでピンクのペニスをヘルマの膣穴へ差し込み、抽送を開始しました。すぐにヘルマは娘に屈服し、甘い悲鳴を上げます。自ら巨尻を振り、娘に犯される喜びに震えました。

(ママっていやらしくて最高だわ！ファックされるのもファックするのも！)

「あなたってふしだらな母親ね、ミス・ヘルマ！自分が産んだ娘に犯されて腰を振るなんて。普段はハンサムな顔して、そんな淫らな面を持っていたの？」

娘からきつい言葉で責められ、ヘルマは思わず胸がキュンと高鳴りました。征服される悦びが一気に膨れ上がり、クリスティーナのペニスをギュッと膣口が締めます。その隙間から愛液がドッと溢れました。



「お許してくださいミス・クリスティーナ、わたしは淫らな母親です！娘の美しい体と素晴らしいおっぱいに欲情し、彼女に嵌められてヨガっています！おう♥も、もっとそんなふうに突き上げ…あああああああっ♥♥♥♥」

「そら、もっと鳴きなさい！なんていやらしくて可愛らしい母親かしら！そんな痴態を見せられて、娘がどれだけあなたをファックしたいと思ってるの！？」

「あああん♥ゆるしてえクリスウウ、ママをファックしてエエエえ♥」

凜々しい母親のあられもない姿にクリスティーナは小鼻を膨らませてエキサイトし、同時に胸いっぱい愛情を感じていました。誰がこんな無防備なヘルマを見られるのでしょうか。彼女が恥も外聞も忘れて欲情した姿を晒せるのは、他ならぬ娘のクリスティーナだけなのです。あたかも特権を得た貴族のように、クリスは誇らしさと愛しさで熱狂しました。

「愛してるって言いなさい、ヘルマ！わたしを愛してるって！わたしだけのものだって！！」

「あああ愛してます、クリスティーナアア♥ あなただけのものよおおおお♥♥♥」

「ーああ、ママ、最高よ！！！！♥♥♥」

クリスティーナは残った体力でありったけ腰を動かし、突き上げ、全身全霊でヘルマを愛しました。強烈なエクスタシーにヘルマがグッタリすると、彼女の体をクリスティーナは裏返し、今度は正常位で犯しました。若い力に促され、クリスティーナはテクニックも知らず乱暴に腰を叩きつけ、無茶苦茶に膣を蹂躪します。けれども、かえってその荒っぽさが母親をより興奮させ、幾度も絶頂へ導くのでした。

（征服される！今度はわたしが！娘に！！）

ヘルマは自ら腰を振り、巨尻を打擲され、膣穴を穿たれました。やがて最後の絶頂が来て、開き切った子宮口へクリスティーナの精液が注ぎ込まれ、全身をわななかせた母親は失神してしまっただけです……

*"Mommy,
you are the best
boyfriend..."*

*"...and You too,
Ms. Christina..."*



…夜が明ける頃、力尽きた二人は抱き合ったまま深い眠りに落ちました。今まで感じたことのない安らぎと満ち足りた思いに包まれながら…

「ーやあ、クリス、この前は悪かったな。今度はちゃんとスケジュールが空いたからデートしようぜ。これから夏休みだし、色々遊べるよな」

ハイスクールで会ったリックは、悪びれもせず言いました。

クリスティーナは無言で腕を組みました。彼女は謎めいた微笑みを浮かべています。なぜか彼女は今までにない色っぽさを湛えていました。ジッとしているだけで色気が滲み出るのです。リックだけでなく、学校の男子生徒（そして幾人かの女子生徒も！）たちもクリスティーナの女らしさに注目しています。

「…その、きみって急に綺麗になったな。とてもクールだぜ」

今までなら魅力的に見えた（そして他の女子には魅力的であろう）リックの笑顔は、クリスティーナには全く通じませんでした。

（こいつのどこが良かったのか全然分かんない）

クリスは揶揄うように言いました。

「あら、ミスター・リック。悪いけどデートの約束は埋まっているの。この先もずっとね」

「ええ？ 誰か他の男がいるのか」

クリスティーナはニヤリと笑い、答えませんでした。

すると丁度その時、校門前に地味なスポーツカーが滑り込み、停車するとクラクションを鳴らします。運転席に居るのはヘルマでした。彼女はサングラスを掛け、胸元を大胆に魅せるタンクトップを着て、優雅に座っています。思わず見惚れてしまう見事なボディで。

「ーーークリス！」

「あら、ママだわ。母親って過保護で困っちゃう♥じゃあね、リック。良い女見つけてね」

「おい、クリス！ ママとデートでもするつもりかよ」

「当・た・り♥」

クリスティーナは手を振り、それからビートへ駆けてゆきました。助手席へ乗り込むと、リックへこれ見よがしにヘルマと熱いキッスを試みせました。呆気にとられるリックに手を振るクリ



スティーナと、ウィンクするヘルマ。ビートは軽快に走り出し、学校を後にしました。

「それでスケジュールは決まった？ミス・クリスティーナ」
「ええ、ミス・ヘルマ。夏休みはどこへも行かず、一日中裸で家の中で母親とファックするの。…ちょっと待って、今のは訂正。外出先でファックするのもいいわね。旅行先のプライベートビー

チでヌーディストに混ざってレズSEXって素敵だと思わない？みんなに私たちの事を見せびらかすの！それから、普通の公園で夜中にこっそりファックするとか…」

ふたりのデートはまだまだ始まったばかりです…♥♥♥♥

♥おしまい♥

★あとかき★

どうもこんにちは、みずいろめがねです。お買い上げ頂きありがとうございます。m (_ _) m

エッチな同人誌を作る時、よく参考にするのがネットで検索した外人さんの画像です。

もちろん日本人にも素敵画像はたくさんあるのですが、外国人、特に西洋人の体格とか肉体美に強く惹かれるものがあるのです。まあミーハーな好みなのですけど、やっぱり金髪碧眼は憧れの美女・美少女であります。

それとポルノ画像といえどハイレベルな物が多いというのもポイント高いです。古代ギリシアから延々と受け継がれた伝統なのか、欧米では女体やSEXを美しく描いて鑑賞する文化が根付いているような気がします。だから例えば有名な「プレイボーイ」のピンナップなんかはほとんど芸術品と言えるまでになっています。モデルさんの見事なボリュームだけでなく、ライティング（光の当て具合）や背景の小道具など、綿密に計算された構成で撮影しているので、こういう意識の高いモノを見せられると圧倒されることもしばしば。

こういった外人（あえてそう呼びますが）さんを一言でいうなら「ゴージャス」が自分のイメージなのです。

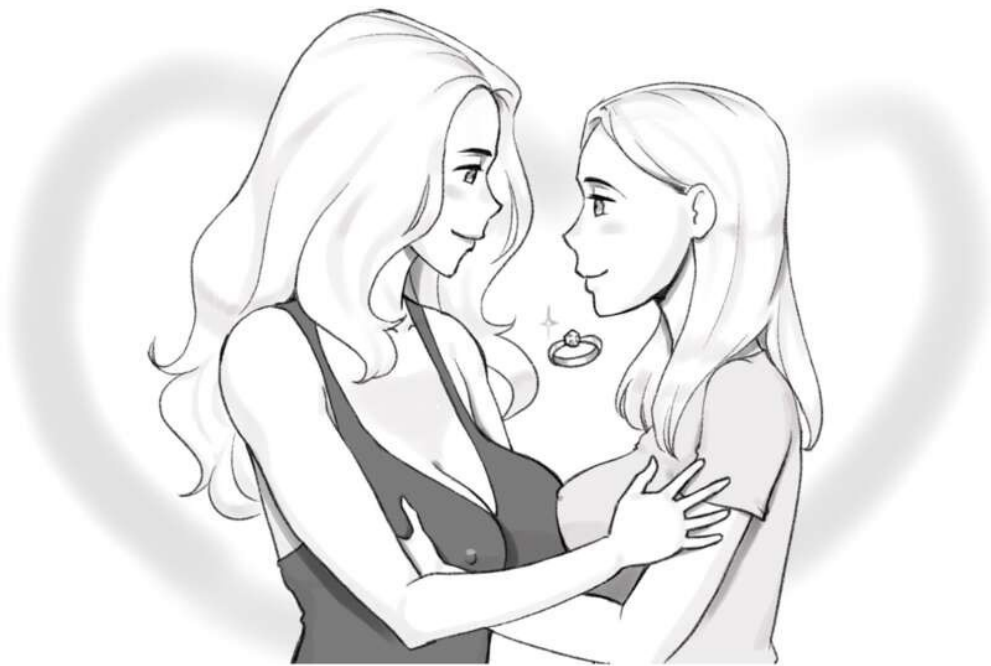
その外人さんのレズ画像などを漁っている時に、自然と妄想が浮かんで勝手にストーリーを作ることがよくあります。そのうちの一本が今回の「パーフェクト・ボーイフレンド」です。

以前にも日本人以外の人を主役にしたことはありますが、はっきりと意識して描いたのは今回が初めてかもしれません。

とはいえ、一応「これが西洋風かな？」と思いつつ書いたのですが、なにしろ英語は喋れないし、現地へ行ったこともないただの妄想ですので、あくまで「日本人の自分から見た欧米風の何か」だというくらいが関の山であります。

美しく迫力のあるボディで愛し合う母と娘…！というツボにハマって楽しく書きましたが、はたして読者の皆さんにはどう映りますことやら。イラストも、もうちょっと外人さんっぽく描ければよかったのですが。なんだかいつもの絵柄になってしまいました（汗。

「そう、これ、こんな感じ♥」と思われる方がいらっしゃれば望外の喜びです。



（↑やっぱり婚約指輪なんか買っちゃうフローリー母娘♥）

こんなテーマでも需要がありましたら嬉しいです。

それでは～♪